

# 九大薬友合誌

第40号

平成30年1月20日印刷・発行編集 福岡市東区馬出3丁目1番1号 九州大学薬学部内九大薬友会事務局  
印刷 小野高速印刷株式会社 大分市松原町2丁目1-6

## 会長挨拶

九大薬友会会長 大戸 茂 弘  
(九州大学大学院薬学研究院 研究院長)



薬友会会員の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。さて、平成26年4月に薬友会会長を仰せつかり早3年半が過ぎようとしております。現在の厳しい社会情勢の中で、九州大学薬学部は将来を見据えた発展の布石を一つ一つ積み上げております。平成27年5月18日に、長年の念願であった

待望の新研究棟「グリーンファルマ研究所」の開所式が開催されました。前薬友会会長の井上和秀先生（九州大学理事・副学長）が研究院長時代にリーダーシップを発揮され実現しました。研究成果は、テレビ、新聞などでも数多く報じられ、九大薬独自の「痛み研究・グリーンファルマ研究」を基軸にした医薬品開発に向けて大きな一歩を踏み出しました。これもひとえに諸先輩方ならびに諸先生方のご尽力の賜物であることより感謝申し上げます。他にも多くの成果があげられておりますので、ぜひとも薬学部ホームページ（HP）をご覧ください。

### 薬学の使命

薬学部は、これまで薬の研究と生産、そして医療の3分野で活躍する薬のプロフェッショナルを育成してきました。卒業生は、医薬品に加えて、化粧品、食品添加物、健康食品、環境汚染物質などを対象とした幅広い分野で、産学官のリーダーとして活躍されています。また薬学部は平成18年度より4年制と並立させ6年制が導入され、薬学府は平成22年度に修士課程、そして平成24年度に博士課程が設置され、新たな研究の展開と医療体制の構築により、国民の健康に資する魅力ある学部・学府となりました。このように、薬学には人類の健康と福祉に貢献する大きな夢が託されているといっても過言ではありません。

薬学研究院では長年にわたり「システム創薬リサーチ構想」(創薬・育薬に関する研究単位を束ね、基礎から臨床まで見渡せる研究環境の構築)を推進し、世界的な研究成果、大型プロジェクト採択など実績を積み上げてきました。平成29年度より国の事業である「創薬等ライフサイエンス研究支援基盤事業」が稼働しております。九州大学独自の「大学改革活性化制度」の支援による「産学官連携創薬育薬共同研究推進による組織改革」を基軸とし、平成25年度に「産学官連携創薬育薬センター」を設置しました。一方で、概算要求では、平成25年度に【重点要求】最先端研究施設整備「九州大学(馬出)システム創薬リサーチセンター」が採択され、平成26年度末に新研究棟「グリーンファルマ研究所」が竣工しました(詳細は第37号薬友会誌をご参照ください)。本研究所では、既承認薬の適応拡大(育薬エコファーマ)に地球環境にやさしい薬の合成(グリーンケミストリー)を融合させた「グリーンファルマ研究」を推進しております。これまでの成果を薬学研究院の第一期活性化と位置づけ、それを追い風に、第二期活性化として「国際的な痛み研究・グリーンファルマ研究推進による組織改革」を推進しております。現在、第三期活性化として「グリーンファルマ推進による医薬品導出加速化のた

め組織改革」を推進しております。本改革により強固となった人的交流や双方向性の循環型産学官・国際連携を深め、医歯薬キャンパス将来構想「産学官連携開放型国際ライフイノベーション拠点」形成に創薬・育薬の視点から貢献することを目指しております。

文部科学省の推進する「国立大学のミッションの再定義」において、九大薬の特色・強みを活かした機能強化の例として、「創薬・育薬に関する研究単位を束ねた分野横断型の教育研究体制を活かした創薬研究者の養成」、「痛み研究、グリーンファルマ研究(環境調和型の育薬研究)など独創的な研究の推進」をミッションに掲げております。平成26年度には、基幹教育が開始されました。1年次の伊都キャンパスでの基幹教育は、学部を越えて教員と学生が一堂に会して学習できる総合大学の特色に満ち溢れ、薬づくりの新たな発想が醸成されます。また2年次以降、医療系学部が同一キャンパス内に位置する病院キャンパスでは、チーム医療や創薬の連携研究が実践できる最適な環境が整備されております。国立大学附属病院では最大規模の九州大学病院に加え、臨床薬学教育センターが稼働しております。さらに九大薬独自の人と地球に優しい「グリーンファルマ研究」を推進するための創薬拠点の形成が加速化しています。平成30年度に、創薬科学科の国際コース設置を目指し、準備を順調に進めているところであります。全学では、約50年ぶりの学部設置となる共創学部が設置される予定です。一方、先輩諸氏もご存じのとおり、テニスやソフトボール大会なども盛んに行われております。これらを通じて、いかなる社会環境にも適応できる強靱な精神力を培うための教育研究環境が整備されております。

九大の推奨するアクティブラーナーとして、常にチャレンジ精神を持って、薬のプロフェッショナルの道に進捗することが「薬学の使命」です。

### 九州大学薬学を支えてくださる卒業生の皆様へ

現在、私たちはかつてない大変な時期にさしかかっております。4年制と6年制並立にともなう様々な調整、大学法人化に起因する多くの未解決の問題、少子化による学生数減少、国家的規模および九州大学独自の状況に起因する人件費削減のダブルパンチと、それによる人員削減と業務の加重、等々の困難な状況で、どうすれば教育の質を確保して、研究の発展を期するか、一工夫も二工夫も考案しなければ薬学は難破してしまいます。先輩諸氏が築きあげた歴史を守り今後の発展を期するには、皆さんの更なるご支援を賜らねばなりません。どうぞ忌憚なきご意見と共に改善策やご協力ご援助を賜れば幸いです。薬学部ホームページ（HP）も刷新され、活動する薬学をタイムリーにお見せしているところです。また薬友会HPもリニューアルをすすめておりますので、よろしく申し上げます。平成29年度には、九州大学の東京日本橋サテライトオフィスが設置されました。日本橋は製薬企業、国家機関などが集結しており、産学連携活動において絶好の拠点となります。産学連携活動はもとより、同窓会、学生の就職活動など多様な交流にご活用いただけますと幸いです。

### 薬友会あり方の改革について

常日頃より薬友会の管理運営にご貢献いただき心より感謝申し上げます。皆様のご協力にもかかわらず、財政はひっ迫し、薬友会の新たな船出の時期となりました。これまで、評議員会では、薬友会在り方の改革について、薬友会の活性化や運営安定の視点から議論

されてきました。第37号薬友会誌に「九大薬友会の在り方の改革に関する提言(井上和秀薬友会会長、赤司俊博評議員、川原章評議員)」が掲載され、会員の皆様からの意見を聴取しました。それを受けて、平成26年度の評議員会で、ホームページ(HP)立ち上げとWeb運営による活性化および健全財政へ踏み出すことが決定しました。その主な変更点を、第38号薬友会誌に「薬友会あり方の改革について」を掲載させていただきました。ご一読いただきまして、誠に、恐縮に存じますが、ご理解とご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

薬友会の絆を強化・発展させる目的で、新たに、本格的同窓会用HPを開設しメール等で周知させていただいたところです。薬友会会員の皆様、教員および学生の皆様の支部大会への積極的なご参加をお願い申し上げます。

同窓会用HPを通して、九大薬友会を、学生にとっても、卒業生にとっても、そしてご年配の方にも有益な会にしたいと切望します。学生に対しては、強力な就職戦線のサポーターとして、あらゆるチャンネルを通じて九大薬学学生の就職を有利に導いていただきたいと思っております。特に、企業や研究所において影響力の大なる地位にある方のご協力が是非とも必要です。卒業生にとっては、社会人として困難にぶつかった場合の良き相談相手になっていただきたいと思っております。また、ご年配の方に取りましては、これまでの人生経験を後進に活かす事ができる場となっていきたい。その総合型が近い将来の九大薬友会です。

#### 最後に

先輩たちが残してくださった本学の確固たる地位を守り、更に発展させるために、私たちは様々な工夫をし、努力を重ねる所存です。どうぞ、いつまでも温かいご支援をたまわりたく、重ねてお願い申し上げます。最後になりましたが、皆様のご健勝を切にお祈り申し上げます。

平成29年10月吉日

## 新任あいさつ



グローバルヘルスケア分野  
教授 小柳 悟

2016年3月1日付けで「グローバルヘルスケア分野」の教授に着任しました小柳 悟と申します。私は2000年3月に九州大学大学院の博士課程(薬物動態学分野 樋口駿教授(当時))を修了後、福岡

大学薬学部で助教として約6年間勤務しました。2005年12月に九州大学薬学研究院製剤設計学分野の助教授に着任し、その後は分野名の変更により薬剤学分野の准教授として研究・教育に携わってきました。「グローバルヘルスケア分野」は、九州大学の第二期大学活性化制度へ提示した薬学研究院の改革案が採択され、グローバルヘルスケア分野とともに新しく設置された分野です。本分野の設置にご尽力いただきました薬学研究院の諸先生方に厚く御礼申し上げます。

薬剤学分野に在籍中は戸茂弘教授の指導の下、生体リズムの制御機構を中心とした病態解析と時間薬剤学に関する研究に取り組んできました。また、教育面では薬物の吸収・分布・代謝・排泄の仕組みを中心に、薬物の体内動態の解析法や医療薬学に関する講義・実習を担当してきました。グローバルヘルスケア分野では、これまでの研究内容を更に発展させ、「生体リズムを基盤にした慢性疾患の病態解明と治療標的分子の探索」を中心テーマに展開していきたく考えています。生体リズムを制御する体内時計は薬物の効果に時刻依存的な変化を引き起こすだけではなく、疾患の症状や病態にも

概日性の変動を生じさせます。腫瘍やそれに伴う難治性の痛みも一日の中の特定の時間帯に悪化することが知られていますが、その仕組みは未だ解明できていません。私はこのような病態のメカニズム解明を通じて、概日的に症状を悪化させる因子の同定と治療標的としての可能性を追求していくつもりです。

大学で行われる研究には多くの学生が携わっていますが、一人前の研究者が揃っているわけではありません。しかし、彼らの常識に捕らわれない発想やモチベーションは、時に思いもよらない発見に繋がる可能性があります。学生の自由な発想とやる気を育て、研究者としての基盤を築かせることが大学で研究・教育に携わる者の使命だと感じています。私自身も大学の中だけでは視野が狭くなりがちになることを肝に命じ、常識に捕らわれない視点から探究を続けて行きたいと思っております。今後とも宜しくお願い致します。



生命物理化学分野  
教授 山田 健一

平成28年4月より、生命物理化学分野(旧 薬品物理化学、旧 機能分子解析学分野)の教授を拝命しました、山田健一と申します。私は、平成6年に九州大学薬学部(桐野豊教授)を卒業後、平成11年に同薬学系研究科(内海英雄教授)博士課程を終了後、米国国立衛生研究所(NIH/NCI: Murali C. Krishna博士)博士研究員、その後帰国しまして、平成14年より九州大学大学院薬学研究院機能分子解析学分野助手、平成17より助教授(准教授)として、長年、九州大学薬学部には大変お世話になってきました。その間、磁気共鳴法を用いたレドックス変動の解析法を主体に研究を進めて参りましたが、平成22年より、新たに「酸化脂質をターゲットとした疾患メカニズム解明および創薬基盤研究」へと展開しております。従来、酸化脂質は、単なる酸化過程で生成する副生成物として考えられてきました。しかしながら最近では、これら酸化脂質、およびその代謝産物が多く機能を持ち、疾患に密接に関与していることが明らかになりつつあります。このように新しい研究にチャレンジを始めたのですが、ラボの立ち上げ当時の学生達が本当によく頑張ってくれたと感謝しております。そのお陰で、現在、少しずつではありますが、成果がでております。これら研究成果につきましては、随時、ホームページに更新したいと思っておりますので、お時間がありましたら、ご覧いただければ幸いです。

さて、今後の創薬研究、日本社会の発展には、若手研究者の成長が不可欠であり、大学に求められる役割は非常に大きくなっていると実感しております。研究室内では、研究のおもしろさ、自分で考え・物事を明らかにしていくことの楽しさを伝えていきたいと思っております。研究に対する「情熱」はもちろんのこと、学生の自由な発想のもと、将来の成長に少しでもつながるよう教育を行うと共に、研究室を運営していく所存です。今後ともご指導・ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



創薬育薬産学官連携分野  
教授 浜瀬 健司

薬友会の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。2016年6月1日付けで創薬育薬産学官連携分野の教授に着任いたしました浜瀬健司と申します。私は東京大学大学院薬学

研究科を修了後、1996年4月から薬品分析化学分野(財津 潔教授)の助手として九州大学薬学部に着任し、2001年1月から同薬学研究院の生体分析化学分野(財津 潔教授)で助教授・准教授、2014年1月からは創薬育薬産学官連携分野の准教授(PI)を拝命してお

りました。

現在、創薬育薬産学官連携分野ではアミノ酸やヒドロキシ酸などの鏡像異性体識別を切り口として、創薬や診断、機能性食品・飲料・化粧品開発など様々な産学官連携研究を推進しております。これらの鏡像異性体識別では、生体内での微量なキラル化合物分析が必須であり、市販の装置のみでは極めて困難です。従って、当分野では新たな分析試薬、分析カラム、装置をはじめとする分析プラットフォームの開発も行っています。現在、世界で三次元キラルHPLC分析が可能な唯一の研究室として新たな領域の開拓を行っています。キラルアミノ酸などの分析では、様々な生体機能を制御する新たな分子が発見でき、創薬や機能性食品開発につながります。病気や老化との関連も明らかになりつつあり、腎障害や心・血管障害、代謝障害などの超早期診断法の開発、新たなタンパク質劣化機構の解明も進めています。またキラル化合物の高感度分析技術を用い、「はやぶさ」メンバーの一員として宇宙における生命の起源物質探索にも携わっており、現在は竜宮から「はやぶさ2」の帰還を待ちながら、超高感度精密分析法の開発を行っています。

創薬育薬産学官連携分野は九州大学の活性化制度で新設された分野です。その名の通り産学官連携研究を推進しながら、研究成果を世の中に役に立つ様々なプロダクトとして実用化、発信する役割を担っていると考えております。これまでも、株式会社資生堂などとの共同研究により、綺麗なスス、アクアレーベル、ビューティープリンセスプレミアムなど多数の商品市販につなげてきました。今後も九大発の多くのプロダクトを医療、食品、化粧品など、幅広い分野で発信できるよう全力で取り組んでいく所存です。どうぞ皆様の御指導、御鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。



### 薬物分子設計学分野 教授 平井 剛

薬物分子設計学分野教授に着任しました。平井剛（ひらいごう）と申します。私は、2002年に東北大学大学院理学研究科化学専攻、平間正博先生のもとで博士号を取得させていただきました。その

後、東北大学多元物質科学研究所（袖岡幹子教授の研究室）の助手に採用され、一度大学教員を務めました。袖岡先生の異動に伴い、私も2004年10月から埼玉県和光市にある理化学研究所に異動し、袖岡有機合成化学研究室の研究員・専任研究員として、およそ12年勤務しました。そして2016年9月から、再び大学教員に戻る機会を九州大学薬学研究院でいただきました。本当に全く新しい環境（職・学部・地域・立場・醤油等々）で研究・教育活動をするようになりましたが、きっと何かとてつもなく良いことがあるに違いないと期待し、この福岡の地に参りました。どうぞよろしく願い申し上げます。

私は、沢山の方々に育てていただきました。恩師や諸先輩方はもちろんですが、本当に私を成長させてくれたのは、将来への期待と不安を抱えながらも、理化学研究所に果敢に飛び込んできた多くの学生・共同研究者です。理化学研究所では、最先端の研究、活発な異分野・国際交流などを経験でき、研究者として育てていただきました。しかしそこで得たもっと重要なものは、共に未踏の領域に挑戦するメンタリティーを、学生・共同研究者と共に培えたことかもしれません。私の研究は、新たな生物活性・機能分子をいろんな知見を活用して設計・創製し、創薬研究に貢献することです。設計した分子は、もしかすると全く活性のない化合物かもしれませんし、合成しにくい化合物かもしれません。でも、思い描いた分子を自ら合成し、その機能を探る研究は、創薬研究者になるための知識や技術だけでなく、チャレンジ精神も育ててくれると信じています。九大の学生さんと共に、社会に何らか貢献できる分子を1つでも多く創出していきたくと思っています。



### 抗がん剤育薬共同研究部門 教授 北尾 洋之

平成29年4月1日付けで、薬学研究院に新設されました抗がん剤育薬共同研究部門の教授として着任いたしました北尾洋之と申します。私は平成4年に京都大学理学部を卒業した後、京都大学大学院理学研究科生物物理学教室分子生物学講

座（山岸秀夫教授）の修士課程、博士後期課程へ進み、平成9年に免疫グロブリン遺伝子座の遺伝子組換えに関する研究で学位を取得しました。その後、京都大学放射線生物研究センター、米国ハーバード大学公衆衛生学校で主に放射線によるDNA損傷とその修復に関する研究に携わりました。3年間の海外留学の後、平成15年に岡山県の川崎医科大学に助手として赴任し、高田穰教授（現京都大学放射線生物研究センター教授・センター長）の元で遺伝性疾患ファンコニ貧血の原因遺伝子群の機能に関する研究に携わりました。高田教授の研究室での5年間は、世界中で次々と新しいファンコニ貧血原因遺伝子が発見されている時期と重なり、とても刺激的な日々でした。平成20年4月より九州大学医学研究院（消化器・総合外科（前原喜彦教授））に新設されました寄附講座「がん分子病態学講座」に准教授として赴任し、初めて九州の地で研究を行う機会をいただき、主にDNA損傷応答の視点から抗がん剤作用機序に関する研究を進めてきました。また、平成22年からは先端融合医療レドックスナビ研究拠点において、産学官連携事業にも従事させていただきました。このたび薬学研究院で、製薬会社（大鵬薬品工業株式会社）と産学連携で抗がん剤の育薬につながる基礎研究を進める機会をいただきました。育薬とは実臨床で使用されている薬を育てることで、そのような育薬を通じてアカデミアにしかできない新たな価値を創造したいと考えています。薬学研究院の一員として、薬を通じて患者様に与える成果を出せるよう尽力して参る所存です。どうぞよろしく願いいたします。



### グローバルヘルスケア分野 准教授 松永 直哉

2016年4月1日付けでグローバルヘルスケア分野の准教授として就任しました松永直哉と申します。私は2005年に九州大学大学院 薬学研究院 薬物動態学分野で樋口駿教授、大戸茂弘助教授の指導の下で博士号を取得し、宮崎大学医学部付属病院で1年間薬剤師として勤めました。その後に、九州大学大学院 薬学研究院薬剤学分野 大戸茂弘助教授の研究室の助教を経て、この度、小柳悟教授率いるグローバルヘルスケア分野に異動致しました。

グローバルヘルスケア分野では、体内時計と炎症をキーワードに化合物スクリーニングや分子生物学的手法を駆使し、炎症のメカニズムの解明、その機構に基づく新薬の開発を目指し取り組んでおります。また平成27年よりシステム創薬リサーチセンターグリーンファルマ研究所が稼働を開始し、国際的研究、産学官連携を積極的に行い、創薬に直接繋がるような独創的な研究が行える環境になっておりますので、この恵まれた環境の中で九州大学薬学部発の薬の開発を行うことを使命と考えております。九州大学薬学部の学生は、素晴らしい可能性を秘めた学生ばかりです。彼らの世界や日本社会で活躍できるような能力をさらに育成していく所存です。これまでに薬友会会員の諸先輩方が築き上げてくださった九州大学薬学部の発展を継続し、さらなる活性化の実現に少しでも貢献すべく積極的に様々な活動を行って参りますので、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



### 薬物動態学分野 准教授 廣田 豪

平成29年1月1日付けで薬物動態学分野の准教授に昇任いたしました廣田豪と申します。私は、平成12年に本大学を卒業後、引き続き大学院に進学しその間、鳥取大学医学部附属病院薬剤部に家入一郎先生（現本分野教授）の指導の元、研究を進め、平成17年に九州大学大学院博士課程（樋口駿教授）を修了しました。平成18年から本分野の助手・助教として勤務してまいりました。学生時代から遺伝子機能の個人差が薬物の体内動態や効果・副作用に影響を及ぼすことに興味を持ち、遺伝子機能に個人差をもたらす要因の解明と薬物適正使用を指向した遺伝子機能の予測バイオマーカーの開発研究に従事してきました。

薬物動態に関連した遺伝子機能の個人差は、薬物治療や医薬品開発において効果不十分や副作用発現などの要因となることが知られています。現在、私は基礎的な検討においてこれまでに得た知見を基盤とした薬物動態解析法の開発を行うことで、上記問題点の克服を目指した研究を展開しております。薬物動態において最も重要な代謝酵素であるCYP3A4の代謝活性には幅広い個人差が存在することが知られており、本遺伝子を対象とした解析は私がこれまで一貫して取り組んできた研究であります。現在までにCYP3A4遺伝子が非常に遠く離れた遺伝子発現調節領域であるCpG islandにより染色体構造の変化を伴うダイナミックな制御を受けるユニークなメカニズムであることを明らかにしており、本機構に基づく代謝活性予測バイオマーカーの確立を進めております。本研究は臨床応用が最終目的であることを勧案すると単独での研究推進は困難であります。これまで薬学部の他分野のみならず医学部、病院などの研究者とも共同研究を進めてきましたが、今後も様々な分野の研究者との協力を一層推し進めていきたいと考えています。薬友会の皆様にはご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



### グローバルヘルスケア分野 准教授 カアベイロ ホセ

It is an honor to introduce myself to the distinguished readers of this venerable magazine. I am Jose M.M. Caaveiro, and since February 1 of 2017, I have the privilege to be member of the Faculty of Pharmaceutical Sciences. As the founding director of the Laboratory of Global Healthcare, and together with the invaluable support of Assistant Professor Yamashita, we are committed to excellence in research and education, and to foster the internationalization of our School. Briefly, I was born in Spain, where I doctorate with honors in Chemistry. After a postdoctoral period at the Massachusetts Institute of Technology and at Brandeis University in the United States, I joined the group of Professor Tsumoto at the University of Tokyo where I took several positions before becoming an Associate Professor of the Faculty of Kyushu University last February. I thank all Professors, and all other members of this magnificent institution, for the very warm welcome. With respect to research, I focus on molecular aspects of diseases of global reach, such as viral and bacterial infections, Parkinson's disease, cancer, and, since my incorporation here, to the study of the molecular factors contributing to chronic pain. For that purpose, I employ the precise tools of Chemistry, Biochemistry and Structural Biology, within the solid framework of Physical-Chemistry and Thermodynamics. From these studies, we not only elucidate

the underlying molecular principles common to these global diseases, a necessary step to combat them, but we also suggest directions towards novel therapeutic solutions to treat and cure them. In addition, I would like to open new avenues towards tackling various of the complications derived from an increasingly globalized world, such as faster and more reliable diagnostic tools across borders, or remedies to ameliorate the physical exhaustion from transcontinental journeys. Moreover, we seek to contribute to the intellectual property of Kyushu University through our inventions and discoveries, and to fortify the industry-academia-government strategic partnership. From an educational point of view, I believe that increasing the international exposure of Japanese students will play a positive role in the education of the next generation of leaders in the various fields of Pharmaceutical sciences. I am absolutely committed to play an important role in this effort and to work to the best of my ability according to the plans established by Kyushu University. Thank you very much for your attention.



### 分子生物薬学分野 准教授 尾崎 省吾

薬友会の皆様におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。私は2017年10月1日付けで分子生物薬学分野の准教授に着任いたしました尾崎省吾と申します。私は2008年に分子生物薬学分野の片山勉教授の指導のもとで博士号を取得し、2011年9月まで同分野の助教として勤務しました。その後退職し、スイスのバーゼル大学バイオセンターにて6年間のポストドク研究に従事しました。そして2017年9月に帰国し、今現在に至っております。

私は細菌の増殖に興味をもって研究を行なっています。細菌は環境に応じて自己の細胞増殖を適宜調節しながら自然界で繁栄してきました。腸内細菌の増殖は我々の代謝や免疫系に資するのですが、いくつかの病原性細菌は宿主内で増殖し、しばしば免疫応答や抗生物質などのリスクを回避して重篤な慢性感染症を引き起こします。抗生物質に依存する今日の医療体制において、出現する抗生物質耐性菌への対応は世界的に喫緊の課題です。このような背景より、私は「細菌増殖の分子制御機構を詳細に理解すること」を細菌に起因する様々な健康問題に取り組むための本質的課題と位置付けました。実際、細菌増殖の理解が深まれば、想定外の感染症リスクに直面しても対応できるような「骨太」の医療体制を実現できるでしょう。

そこで私は細菌増殖にとって重要な細胞原理を解き明かすべく、分子生物薬学分野の片山勉教授と連携して日々の研究に勤んでおります。そしてこの活動を通じて、学部生や大学院生に研究の面白さや大切さを伝えていきたいと思っております。浅学の身ではございますが研究・教育に一層精励いたす所存でございますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



### 環境調和創薬化学分野 講師 森本 浩之

2017年1月1日付けで環境調和創薬化学分野の講師に着任いたしました森本浩之と申します。私は、2009年に東京大学大学院薬学系研究科博士課程（柴崎正勝研究室、エステル等価体を用いた触媒反応に関する研究）を修了後、同年から博士研究員として米国イリノイ大学アーバナシャンペーン校のJohn F. Hartwig研究室にて1

年3ヶ月有機金属化学に関する研究に従事した後、2010年7月より九州大学大学院薬学研究院病態分子認識化学分野（現：環境調和創薬化学分野、大嶋孝志研究室）に助教として着任し、6年半余り研究・教育に取り組んで参りました。

現在の主な研究テーマは、環境調和性の高い触媒反応の開発と、温和な条件での不活性結合の切断反応の開発です。医薬品を始めとした高機能性有機化合物の合成は、資源が乏しい日本において重要な基盤技術の1つですが、現在でも大量の廃棄物を副生する方法が主に用いられており、環境に負荷を与えない手法の開発が望まれています。そのような状況において、私は環境調和性の高い合成を可能とする新しい触媒を開発し、誰でも使えるような実用性の高い手法の実現を目指して、研究を行って参りました。その結果、従来困難と考えられてきた難易度の高い環境調和型反応が実現可能なことが判明しつつあります。また、共同研究にて創薬シーズの最適化研究やプローブ合成なども行っており、上記の研究と合わせて九大薬学部独自のグリーンファルマの実現に向けて微力ながら貢献していきたいと考えております。

今後環境調和の教員一同および学生と共に、九大薬学部を盛り上げていけるよう、研究・教育ともに精進して参りたいと思います。まだまだ至らない点も多々あるかと思いますが、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。



臨床育薬学分野  
講師 小林 大介

平成29年1月1日付で臨床育薬学分野の講師に着任いたしました小林大介と申します。私は、平成17年に九州大学大学院薬学府博士課程を修了後、本学薬学研究院薬剤病理学分野（美根和典教授）の助手を経て、臨床育薬学分野助教として勤務してまいりました。この間、各種薬剤の薬効や副作用の発現に個人差が生じることに興味をもち、薬物動態学分野の家人一郎教授のご指導の下、遺伝子情報に基づいた医薬品の適正使用に関する研究を行ってまいりました。

6年制薬学教育の開始に伴い、平成21年からは九州大学病院薬剤部講師を兼任し、調剤やTDM業務に従事しながら、臨床薬学教育センターの教員として、臨床薬学科の教育・研究を担当しております。臨床薬学教育センターでは、実務実習事前学習をはじめ、薬学共用試験、病院・薬局実務実習、薬剤師国家試験対策の支援に関わる業務を行っております。最近、臨床薬学科の卒業生が、就職先の病院で筆頭著者として発表した論文を拝見し、卒業生の活躍を嬉しく思うとともに、自分ももっと頑張らねばと刺激を受けているところです。

研究としては、薬剤部でのTDM業務に関連した血中薬物濃度測定法や投与設計法の構築に関する研究のほか、福岡市薬剤師会との共同研究として実施している「節薬バッグ運動」など、保険薬局における患者の残薬削減や服薬アドヒアランスの向上を目的とした研究を行っています。これからは、地域の保険薬局、薬剤師の役割がますます重要となるため、病院のみならず薬局で問題となっていることを解決するために、基礎と臨床を結ぶトランスレーショナル研究ならびにリバーストランスレーショナル研究を念頭に、より実りのある研究に取り組むたいと思っております。まだまだ微力ではございますが、薬学研究院における教育・研究に精一杯努力してまいりますので、会員の皆様には、今後ともご支援とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

## 定年退職にあたって



細胞生物薬学分野  
西村 行生 (第23回生)

私は昭和45年4月に九州大学薬学部に入学しましたが、その後3年間のニューヨーク大学への留学時期を除くと九州大学には44年間お世話になったこととなります。鹿児島県立鶴丸高校を卒業して福岡

岡に出てきて当時の教養部があった六本松で出会った薬学部同級生達（第23回生、昭和49年卒）は皆元気の良い連中でしたので明るい将来に期待しながら彼等と毎日澁刺とした気分で楽しく過ごしたことが懐かしい思い出です。六本松での彼等との偶然の出会いには長い研究者生活で時々背中を押してくれる大切な存在になりました。そして学部4年時の昭和48年夏頃には生理化学教室（加藤敬太郎教授）に配属され、その後大学院修士、博士課程に進学しました。当時の研究室では「リソソームの形成機構」の解明が主な研究テーマでした。特に国際的にはロックフェラー学派と呼ばれたC. de Duve, G. Palade等による電子顕微鏡、細胞分画法を用いる研究によりリソソームの存在が証明され、1974年（昭和49年）には彼等がノーベル生理学医学賞を受賞したことで、その後のリソソームに関する研究対象はリソソームの機能解析へと移っていきました。生理化学教室の主要研究テーマである「リソソーム形成機構」は当時の当該研究分野のトピックでもありましたので、研究室のスタッフ、大学院生達は活気に満ちて毎日熱く議論し、夜遅くまで実験していたことが懐かしく思い出されます。私の研究テーマはリソソーム酵素である $\beta$ -glucuronidaseの生合成と細胞内移行の解析というもので大学院博士課程進学後もこのテーマに取り組みました。博士取得後は海外で研究する機会を得て、1981年8月からニューヨーク大学医学部細胞生物学教室のD. D. Sabatini教授の研究室でポストドクとして研究することになりました。当時はリソソームタンパク質についてのアミノ酸配列構造についての情報が無かったので、 $\beta$ -glucuronidaseのcDNAクローニングによるアミノ酸全配列決定を行うという研究テーマを頂きました。私は当初技術的にも慣れてないこともあり実験は難航しましたが、翌年の12月末にやっとcDNAクローニングに初めて成功し、決定したアミノ酸配列の全構造はPNAS誌（1986年）に発表できました。この研究には実験開始から約5年を費やしました。

1984年夏に帰国後は、生理化学教室に助手として採用され、加藤先生のご厚情によりリソソームプロテアーゼであるカテプシン分子群の生合成、プロセッシングと細胞内輸送機構についての研究に従事しました。複数のカテプシン分子の活性化とプロセッシング機構を解明しそれらの成果は国際専門誌に発表しました。この研究テーマの推進には研究室の辻宏先生（福山大学教授）、姫野勝先生（九大教授、現長崎国際大学教授）、古野浩二先生（福山大学教授）他、多くの大学院生の方々にご協力いただきました。

1992年には同研究室（姫野勝教授）の助教授に採用され、これまでの基礎生物学領域の仕事に加えて“リソソームと癌悪性化”という新たな研究テーマに取り組むことになりました。特に最近では細胞増殖因子受容体の細胞内動態が癌悪性化に関連し、また癌分子標的薬による癌細胞の耐性化機構にも繋がるという現象を見出しました。これらの研究成果は毎年国内外の専門誌等で発表することを心がけてきましたが、平成29年7月に大阪で開催された第26回日本がん転移学会総会において学会功労賞なるものを頂き、研究成果が認められたことと感じており誠に光栄なことと思っております。これまでの研究のためには良き恩師、同輩、後輩に恵まれたこと、そして多くの共同研究者達の協力無しには成し得ませんでした。そして私の研究への想いをお許し下さった九州大学薬学研究院の教職員、そし

て事務職員の皆様方には改めて心からお礼を申し上げます。



## 小嶋正治先生を偲んで

前田 稔

小嶋正治先生が90年の生涯を閉じられたのは平成27年12月17日でした。その3ヶ月前まではお元気でお過ごでしたので、突然のご訃報には全く思いもかけないことでありました。

先生は東大医学部薬学科をご卒業後、九大医学部薬学科薬品製造化学教室の助手、助教授を経て、昭和42年に九大薬学部の放射性薬品化学講座担当教授として迎えられました。平成元年3月に定年退官されるまで長きに亘って有機合成化学を基盤として、揺籃期における我が国の放射性医薬品の開発に関わる領域を切り開かれました。また、薬学におけるアイソトープ・放射線の教育基準策定にも熱意を傾けられ、今日の礎を築かれました。特記すべきことの1つは副腎イメージング剤を開発することに成功され、これは今日に至るまで放射性医薬品として臨床利用されています。日本核医学会や日本アイソトープ協会等の理事や委員会委員長として、特に放射性薬剤の品質管理とその臨床利用に関する策定など、核薬学の観点から指導的役割を果たされました。学内にあっては、学部長・評議員として大学の管理・運営にも手腕を振るわれました。これらのご功績により平成15年に勲二等瑞宝章を受章されました。

学生に対してのまなごしは優しく、一方で「万事怠りなきように」という先生のご教示は、今でも心に強く残っております。先生は焼酎をこよなく愛され、またカメラにも造詣が深く、しばしば研究室で自慢しておられたのを懐かしく思い出されます。九大名誉教授になられてからも、先生は岩手県滝沢市の仁科記念サイクロトロンセンターのセンター長として、また、オーストラリアへ研究指導に赴かれるなど、なおお仕事を地で行くお姿でした。ここに改めて、学恩に感謝の意をお捧げいたします。

(昭和44卒・昭和49院修了・九州大学名誉教授)

## 渡辺繁紀先生を偲んで

臨床育薬学分野 島 添 隆 雄

本学名誉教授の渡辺繁紀先生が平成29年3月31日に逝去されました。

先生は、昭和39年3月九州大学医学部薬学科を卒業され、昭和41年3月九州大学大学院薬学研究科修士課程を修了されました。修士課程修了後、大学院博士課程に進学され、昭和41年6月より九州大学薬学部助手に就任されました。その後、助教授(昭和50年7月)を経て、平成2年7月には九州大学薬学部教授に就任され、薬理学教室(現・薬理学分野)の教授として薬理学の教育・研究に努められて、平成16年3月に退職されました。九州大学在職中には、平成10年4月に九州大学薬学部長および薬学研究科長を務められています。平成16年5月には、九州大学での永きに亘る教育・研究面における功績が認められ、九州大学名誉教授になられています。九州大学退職後は、第一薬科大学顧問、第一薬科大学学長代理として大学の運営に携わられました。

研究面において、先生は中枢神経薬理の第一人者として有名でし

た。著名な研究内容としては、「脳神経の可塑性についての電気生理学的研究」、「薬物の逆耐性現象に関する研究」、「体内時計に関する研究」があります。

教育面においては、その講義の深み、表現力の巧みさ、講義に学生を惹きつける魅力には定評があり、薬理学に全く興味を示していなかった学生の大半が薬理学に魅了されるようになりました。また、数多くの薬学博士学位取得者を養成され、その多くは大学教授をはじめとしたアカデミアにおける教育・研究者、あるいは企業・公の研究所における研究者になるなど、現在指導者として活躍している人物を輩出されています。

以上のように、先生は、薬学教育・研究者という立場から日本の科学の進歩に貢献され、また有能な人材の発掘・育成にも尽くされました。その功績から正四位瑞宝中授章の叙勲を受けられました。

先生とテニスや野球を共にさせて頂いた日々が偲ばれます。ここに謹んで先生のご冥福をお祈り致します。

## 山田英之先生を偲んで

分子衛生薬学分野 石 井 祐 次

未だに信じられない方も多いかと思いますが、九州大学大学院薬学研究科分子衛生薬学分野の山田英之教授(主幹教授)は、平成28年2月22日、胃がんのため逝去されました(享年61歳)。山田先生は昭和52年に長崎大学薬学部をご卒業後、九州大学大学院薬学研究科にご進学になり、昭和54年に修了され、大学院博士課程にご進学になりました。昭和55年からは二代目教授の吉村英敏先生が主宰しておられました衛生化学・裁判化学教室の助手に就任され、本格的に教育と研究の道に進まれました。この間、昭和61年には米国Michigan Cancer Foundationにご留学になり、発がん性芳香族アミン、ヒドロキシアミンの研究に従事されました。また、三代目教授の小栗一太先生の下で、助教授としてご活躍になりました。平成14年には第四代教授に昇進され、小栗先生ご退官後の研究室をご継承になり、教育・研究および学部や大学運営に多大な貢献をなされました。

先生は、助手時代は、乱用薬物の代謝とその機構に関する研究に、助教授時代にはシトクロムP450の発現調節機構に関する研究に情熱を注がれました。教授になられる頃から挑まれた、薬物代謝第一相酵素と第二相酵素の機能的連携に関する研究では、先駆的な業績を挙げられました。また、先生は低用量ダイオキシン暴露母体から生まれた児の性未成熟が、臨界期の脳下垂体の性腺刺激ホルモン(黄体形成ホルモン)の低下によって引き起こされることを初めて発見され、ダイオキシン後世代影響解明に貢献されました。

山田先生は、人情豊かな方で、一人一人の学生の個性を大事にしながら、到達目標を設定して導いて行かれる方でした。現役教授の訃報は、スタッフ・学生達にとって衝撃でしたが、先生の遺志を継ぐべく、皆一層頑張り、種々の賞を頂くとともに、学生達は元気に社会に旅立って行っています。山田先生のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。合掌



山田英之先生が、胃の全摘出の一月後に年会長を務められた日本法中毒学会第34年会終了後に分子衛生薬学分野研究室メンバーと撮影。先生の復帰を喜んだのも束の間、これが皆との最後の写真となった。追悼記事は、Drug Metab. Rev. 48(4): 471-472 (2016)。下記の大九リポジトリサイトをご参照ください。http://hdl.handle.net/2324/1792717

# 支部だより

## (関東支部)

関東支部副支部長 松野 研 司 (39回生)

九大薬友会会員の皆様におかれましては、お健やかに過ごしのことと存じます。関東支部の近況をお知らせするように支部長の柴田重信先生(25回生)から指示がありましたので、僭越ながら一筆書かせていただきます(柴田先生は昨年10/2にNHKあさイチ「聞食に大革命! ? 時間栄養学最前線」にご出演になるなど、ますますご多忙の毎日です)。

現在、関東支部は1000名を超える大所帯となっています。毎年5月の恒例行事である関東支部総会には多くの会員の皆様にお越しいただき、様々なチャンネルでの交流が盛んです。支部総会においては、(ありきたりの?) 活動報告や会計報告等に加えて、多方面でご活躍の会員諸氏による講演会を開催しています。この講演会は、薬剤師研修センター認定研修会として認められており、受講シールがゲットできることも参加率向上に一役買っているようです。

最近15年間ほどは、支部総会担当幹事を『卒業回生ローテーション制』、すなわち、毎年の担当幹事を代送りでお願いしています。担当幹事のアイデア・個性(感性)が発揮された楽しい意義ある総会開催が定着しており、毎年多くの参加者にお越しいただいています。この方式は、担当幹事の皆様に相当なご負担をおかけすることにはなりますが、一方でこの機会に近隣の同級生に連絡を取り合うことで、同級生同士の旧交を深める大変良い機会になっています。今年(平成29年)度の関東支部総会@神田・学士会館は、36回生の先輩方(幹事代表: 別府学さんを始め、井上誠さん、大浦(山下)真治さん、竹重哲男さん、檜垣雅英さん、満井哲也さん)に幹事役をお願いし、100名を超える大勢の方にご参加いただきました。聞くところによりますと36回生の先輩方は、この機会を活用して(支部総会終了後に)ミニ同窓会を開催されたようで、遠くは長崎在住の方にも関東支部総会にご参加いただきました。小職個人的にも、卒業以来ご挨拶できていなかった多数の先輩方にお目にかかれたことは、後輩としても大変嬉しいことでした。来年(平成30)度は、37回生の先輩方が担当幹事として5/20に開催予定です。ぜひ多くの皆様にお越しいただけますことを楽しみにいたしております。

さらに関東支部は、数年前から橋本光紀先輩(会計監査:13回生)を中心に九州大学東京同窓会(九州大学同窓会連合会)にも参画し、8月下旬頃に開かれるSummer Festaパーティーにも多くの会員が参加しています。東京同窓会も年々盛況になっていることから、他学部の卒業生との懇親を深める良い機会になっています。

最後になりますが、小職は平成27年4月に岡山から東京に異動し、関東支部の仲間に入れていただきました。今まで同窓会活動には(遠方ということもあり?) ほとんど顔を出せておりませんでした(同じ薬化の大先輩でもある元支部長・秋田弘幸先生(17回生)からお声がけいただき、昨年度より副支部長(庶務・会計担当)を拝命しております。学生時代の私を知る皆様には、『えっ? あいつが?』とニヤニヤされそうですが、今までの罪滅ぼしの気持ちも込めて微力ながら精一杯務めさせていただき所存です。今後とも、関東支部の活動に対するご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願いたします。機会がありましたら、向山レイ副支部長(15回生)が管理運営されている支部HPも是非ご覧ください。

<http://kyushu-yakuyu-kanto.la.coocan.jp/>

末筆ながら、会員の皆様方のますますのご多幸をお祈りいたしております。



## (関西支部)

関西支部 事務局 江頭 啓 (43回生)

薬友会会員の皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。現在、九大薬友会関西支部は設立されてから33年目となりました。会員数は400名強で、関西圏の製薬企業、大学、医療機関等において様々な分野、職種で活躍されています。

関西支部ではホームページの運営、年3回の幹事会、および親睦会を兼ねた年1回の総会を主体とした同窓会活動を行なっています。本年度は、9月29日(金)にガーデンシティクラブ大阪において第33回総会・同窓会を開催させていただき、39名の方にご参加いただきました。

総会では、支部長挨拶の後、前年度の活動報告および会計報告、本年度の活動計画および予算案、次期支部役員候補の紹介および承認が行なわれました。そして支部運営費の減少傾向に対する対策として2015年度より開始しております総会案内状送付における電子メールの利用の現状をご報告いたしました。メールでの送付は150通、郵送での配送数は250通となりました。引き続き、総会案内のメールへの移行を進めて参りたいと考えております。役員選出に関しましては、昨年度より、ご活動いただきました足立 圭司さんが退任され、高田誠さんが新たに役員として支部活動に加わっていただいておりますことをご報告し、ご承認いただきました。

総会に続き、今年度は薬友会員からの報告として、早瀬 真生さんから「青年海外協力隊への参加」のご経験について、お話しいただきました。また、毎年恒例の講演会では、九州大学 大学院薬学研究院 生命物理化学分野 山田 健一先生にお越しいただき、「酸化脂質の検出から創薬展開を目指して」というタイトルでご講演いただきました。まず、九大・薬学部をはじめ、病院、薬剤部や大学周辺の多くの写真を交え、九大の近況をお話しいただきました。また、疾患に密接に関与していることが報告されている脂質過酸化物の代謝産物について、脂質ラジカルを鋭敏に捉え、結合した分子の構造を解析する技術の確立という最先端の研究をご紹介いただきました。

講演会のあとは、恒例の青木顧問のご発声・乾杯で懇親会が始まり、山田先生をはじめ参加者の皆さんにゆっくりご歓談いただきました。懇親会には毎年新入会員をご招待しておりますが、今年度は11名の新入会員の方にご参加いただき、自己紹介を行っていただきました。本年度は多くの新入会員にご参加いただき、大変盛り上がりしました。終会前には恒例の抽選会を行い、最後は参加者全員揃っての記念撮影を行ない、盛会の内に総会を終えることができました。

最後に、関西支部のホームページ(<http://yakuyu.info>)に今年度の総会写真を掲載しております。また、これまでの総会写真や支部便り等も掲載しておりますので、総会・同窓会に参加いただけなかった卒業生のみならず、ぜひともホームページにお立ち寄り下さい。

九大薬友会関西支部では会員相互の親睦の輪を広めるとともに、かつて共に学んだ母校の発展のために、少しでもお役に立てることを願って活動しております。そのために、関西支部会員のみならず、九大薬友会全員の皆様の一層のご支援を賜りますように、今後ともよろしくお願いたします。

関西支部会員の皆様へのお願い: メールでのご連絡にご賛同いただける方は、関西支部メールアドレス([info@yakuyu.info](mailto:info@yakuyu.info))までご連絡ください。



## (福岡支部)

よか薬会会長 唐澤博順(19回生)



平成28年から会長を務めることになりました19回生の唐澤と申します。これからよろしくお願ひ致します。野田前会長には、長きに渡り「よか薬会」を導いて頂き、誠にありがとうございました。

平成28年4月14日、九州にまたもや大きな地震が来しました。一夜明けての報道で、熊本、別府が大変だということを知りました。あれからそんなに時間は経っていませんが、めまぐるしく新しい出来事が起こり熊本地震のことを忘れようとしています。熊本地震の後、熊本／大分はどうなっているのか？どのように復興が進んでいるのか？自分達は何をすればよいのか？ロシナンテスの活動の中から報道では知らされない生の部分を大嶋氏にお話し頂きました。

さて、平成28年の総会・講演会・懇親会のご報告をいたします。

まず、「よか薬会」の活動報告を庶務と会計から行いました。次に、家入一郎 九州大学大学院薬学研究院教授・副学部長から「九大薬学の現状」を報告して頂きました。講演会は大嶋一馬氏から「被災地の現状と問題点について」のお話しを頂きました。内容は、概ね次の通りでした。

近年、国内において阪神淡路、東日本、熊本と大災害が発生した。阪神淡路ではボランティア等の行政以外の支援活動が確立され、東日本ではNPO等の支援団体の活躍と行政との協働が広まった。熊本は甚大な被害をもたらしたが直下型地震のため津波がなく、東日本と比較し被害は小規模であった。支援物資や人材は一挙に集まったが、その資源が適材適所に有効に使用できたとはいえない。支援者は自己の支援が十分に行えるようにそのコーディネート等を地域に精通している自治体に期待する。しかし、災害により業務の質と量が著しく変化することにより自治体は機能不全に陥る。被災者にとっての支援とは一時的なものではなく継続して行われるべきものであり、国を中心とした行政の力が必要である。被災地には、たとえ相手が支援者であっても生活を補助するだけの余裕は無い。支援活動は支援者の自己完結型で行わなければならないと言うものであった。

今回、特筆すべき点は、17名の学生さんに招待参加して頂いた事でしょうか。懇親会に学生参加の情報交換会を催しましたところ、例年に無い盛り上がりが見られました。先輩方から、日頃欲しくても手に入らない貴重な生々しい情報を受け取っていました。学生の欲しい職種別情報を、その職種の先輩達が伝える…数グループに分かれ、あちこちで盛り上がっている会場を想像して下さい。これには就職先候補施設の見学など後日談も伴い成果の多い会となりました。

平成29年の「よか薬」の総会・講演会・懇親会を案内いたします。

日時 2017年11月11日(第二土曜) 17時30分～21時30分

場所 アークホテルロイヤル福岡天神

例年通り、総会、講演会、懇親会の3部構成です。

総会 「よか薬会」報告：庶務、会計

報告 「薬学部の現状と将来」大戸 茂弘 教授・研究院長

講演会

講演 小河 正雄氏(25回生)

別府大学食物栄養科学部発酵食品学科 教授

要旨「ダニと感染症の話」

ダニと聞くと皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。室内で刺すダニ、ダニアレルギー、犬につくダニ、植物につくダニなど多様なダニが存在します。私が今までに関わったダニは、つつが虫病を起こすツツガムシ、日本紅斑熱、SFTSやライム病を起こすマダニなど、医ダニ類とよばれるダニ類です。つつが虫病は古くは東北地方の風土病として知られていましたが、新型つつが虫病の存在が明らかになり、九州はつつが虫病の患者が多い地域であることが分かってきました。最近では、マダニによる感染症が増えており、しばしばマスコミにも取り上げられます。これらの感染症の現状や対処法についてお話しします。

その後写真撮影をし、最後に懇親会を行います。

## (長崎支部)

長崎支部長 淀 光 昭(31回生)

九大薬友会会員の皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

長崎支部では、支部総会を平成27年度は平成28年2月13日(土)に、また平成28年度は平成29年2月11日(土)に、いずれもJRハウステンボス駅前のホテルローレイで開催しました(平成27年度は27名、平成28年度は17名が参加)。

長崎支部には、支部会則がないこと、支部役員が支部長のみであること、会計監査ができていないことなどの支部運営に関する問題があります。支部会則については、他支部の会則や規約を参考にして案を作成し、支部総会において承認を得ることを計画しております。支部役員に関しては、平成27年度の支部総会において副支部長を設置することが提案され、その場で長崎国際大学の山口拓先生(院44博)が推薦され、満場一致で承認されました。支部総会では、参加者増に向けた取り組みなどを話し合いました。長崎支部には薬剤師をされている会員が多いので、地域の薬剤師会に所属する支部会員のネットワークを利用して、参加を呼び掛ける必要があるとの意見が出されました。支部会員が多い地域には幹事を置くなどの支部運営上の施策が必要ですが、それにはまず支部会則の制定が必要で、今後の課題となっています。

支部総会の中では講演会を行っており、平成27年度は、九大大学院薬学研究院 生物有機合成化学分野 准教授 谷口陽祐先生(50回生)に「九州大学薬学部の現状および核酸損傷塩基を基盤とした創薬研究」の演題で講演いただきました。先生は現在の九大薬学部とその周辺の様子を写真で紹介され、九大における薬学教育の現状と先生ご自身の最新の研究成果についてお話されました。

平成28年度は、玉峰寺(南島原市)の住職である太瑞知見(41回生 中村知見)氏に講演いただきました。九大大学院修士課程終了後に駒沢大学で仏教を勉強されて、玉峰寺で住職をしながら色々な活動をされているというユニークな経歴の持ち主です。「お釈迦さまの薬箱」という本を出版されており、「インド・チベット・中国の仏典にあらわれる薬品の紹介」という演題で講演いただきました。非常に面白いお話でしたが、講演会に引き続き行われた懇親会でも大いに場を盛り上げていただき、会員相互の親睦の輪が広がったように感じられた支部総会でした。

平成29年度の支部総会は、平成30年2月10日(土)にホテルローレイで開催します。できるだけ多くの支部会員の方にご参加いただき、

今後の支部総会のあり方や支部活動について忌憚のないご意見をいただきたいと考えております。

末筆ながら、会員の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げるとともに、長崎支部のさらなる発展へ向けご支援をお願いし、ご挨拶といたします。



## (大分支部 (豊薬会))

大分支部事務局 菅田 哲治 (41回生 薬製&植化)

大分支部は、豊後の国(ぶんごのくに)に因んで「豊薬会(ほうやくかい)」の名前で活動しています。会員は約140名(名簿上)であり、県内に薬学部や大きな製薬会社がないこともあって、その多くは、保険薬局、病院、行政等に勤務しています。

豊薬会の活動としては、7月に有志6名が集まり、暑気払いを兼ねた懇親会を大分市内でおこないました。参加者は、昭和48年卒から平成29年卒までと幅広い年齢層で、お互いの近況報告や今後の活動の他、六本松や馬出周辺の今昔、伊都キャンパス、同級生や先輩、後輩の活躍等について語り合い大いに盛り上がりました。また、在学中には大分県内の情報があまり入らなかったことから、支部として何らかの情報発信が必要ではないかとの認識も共有しました。

今年度の全体同窓会は、1月27日(土)に開催する予定としています。より多くの方に参加していただけるように大分駅前ホルトホールを会場とし、特別講師として薬剤学講座に在籍されていた松山賢治先生(現在、第一薬科大学)をお招きすることとなっています。県内在住の方には、奮ってご参加いただければと思います。

一方、支部活動とは異なるのですが、「大分県出身・在住の九州大学卒業生が集まり交流する会」として、3月に第1回九州大学大分同窓会が大分市内で開催されました。経済学部、法学部、医学部の卒業生4名が発起人代表となり、さらに、発起人として歯学部、農学部、理学部、文学部、工学部の卒業生とともに薬学部から私もお手伝いさせていただきました。この同窓会には、総勢114名、ほとんどの学部から参加者がありました。薬学部からの14名参加は、学部としては3番目に多く、以前からおこなわれている豊薬会活動がこの参加人数につながった一つの要因ではないかと思えます。

会は、発起人代表の経済学部卒業生による挨拶から始まり、乾杯、各学部の紹介と代表者スピーチ、九大男子学生寮であった田島寮の寮旗、寮歌披露などを交えながら、学部、世代の垣根を越えた歓談により、親睦を深めてゆきました。参加者には、行政、銀行、生命保険会社、新聞社、百貨店、電機メーカー、酒造会社などに勤務されている方、医師、歯科医師、薬剤師、弁護士などがおられ、職業、職種は多種多様であり、普段聞くことのないようなことが聞けたり、また、県内でニュースになるような様々なことに深く幅広く関わり活躍されていることを知ることができたりと、とても刺激的でした。また、会の途中で、本会の名称を決めることになり、六本松や九大に因んだ4つの候補が挙げられ、出席者全員で投票をおこなった結果、「豊松会」に決まりました。豊松会は、会則や年会費を設けず、実費負担による年1回程度の懇親会で親睦を深めるゆるやかな会であり、誰でも参加しやすいのではないかと思います。

会の最後には、発起人代表の法学部OBによる締め挨拶により再会を約束して散会となりました。既に2月21日(水)に第2回が開催されることが決まっています。多くの方にご参加いただければと思います。

大分では、今後、豊薬会をさらに盛り上げるとともに、豊松会とのつ

ながりにについても進めてゆきたいと考えています。

## (鹿児島支部)

鹿児島支部長 魚住 太志 (31回生)

九大薬友会の皆様、お元気でご活躍のこととお慶び申し上げます。

遅くなりましたが、2016年4月に発生した熊本地震により被災された方々にお見舞い申し上げるとともに、一日も早い復興をお祈り申し上げます。

当支部では、毎年、総会・講演会・懇親会を「お盆明けの最初の日曜日」に開催していましたが、出席者が固定される傾向がありました。試しに平成28年は8月27日(土)、平成29年は8月26日(土)に開催して様子を見ましたが、出席者は例年とあまり変わらず20人程度でした。

ただ、これまで出席者の少なかった40~50歳代の参加者が多く、一定の成果があったと思われまます。

### 1 総会について

九州大学医学部同窓会鹿児島県支部の上村教授から九州大学全学部による鹿児島支部同窓会を立ち上げたいので、薬学部にもぜひ参加をお願いしたいとの依頼がありました。平成29年の総会で協議したところ参加してもよいとの結論に至りました。

新たな動き等がありましたら、皆様にお知らせしたいと考えております。

### 2 講演会について

昨年は、支部会員の五郎丸毅先生(福山大学薬学部 名誉教授)から「安定同位体による代謝研究」についてご講演を賜りました。安定同位体の一つである重水素を用いて生体内での薬物代謝を測定する方法をわかりやすく説明してくださいました。平成29年は、伊東祐二先生(鹿児島大学理工学域理学系 教授)から「抗体と薬剤の結合制御による抗体医薬品開発の新しい展開」、山下智大先生(九州大学大学院薬学研究院 助教)から「グリーンファルマシアが切り拓く新たなアカデミア創業」についてご講演を賜りました。伊東先生の講演は、抗体医薬品に「部位得的抗体修飾(CCAP)法」の技術を用いて薬剤と抗体を強く結合させることを可能にしたとの内容で、平成29年5月の日本経済新聞や南日本新聞にも掲載されました。山下先生にはグリーンファルマ研究所がオープンして2年強経過し、その間の研究成果等について説明していただきました。

### 3 懇親会について

各自の近況報告等もあり、楽しいひと時を過ごすことができました。

来年も8月下旬の土曜日(鹿児島錦江湾サマーナイト大花火大会と同日以外)の土曜日に開催しますので、お間違えのないようお願いいたします。多数の参加をお待ちしております。

## 教室だより

### 薬物動態学分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。現在、薬物動態学分野は家入一郎教授、廣田豪准教授のお二人のご指導の元、毎日楽しい研究室生活を送っております。最近の研究内容として、実験系では薬物代謝酵素・トランスポーターの個人差要因解明に向けて遺伝子多型、エピジェネティクス、microRNAに着目した検討を行っています。解析系では、臨床試験、電子カルテデータの解析に加え、文献データを用いたPPK/PD解析を新たに行うようになりました。

教室メンバーは、博士課程がD4の桑原さん、藤田さんに、D3の武居さん、D2の柏原さん、D1の村木君と薬剤師免許取得コースに進学したD1の玉城さん。さらに社会人博士課程の7名を加えた計13名が在籍しています。修士課程はM2の上高さん、河野君、寺尾さん、松

原君、M1の東原さん、藤井君、柳井さんです。創薬科学科4年生の小西君、田尻さん、玉岡君、藤田君は来年度、修士課程に進学します。

臨床薬学科の6年生、井上君と繁昌君は11月に卒論発表、来年3月に薬剤師国家試験を控え、大学6年間の集大成の時期となりました。5年生の竹中さん、渡嘉敷さん、富松さん、樋口さんは現在病院・薬局実習中で、4年生の角野さん、添野さんは授業の合間に研究を進めながらOSCEとCBTに向けて日夜勉強に励んでいます。来年度からは、上高さん、寺尾さん、松原君が薬剤師免許取得コースに進学する予定です。この他、解析ゼミもこれまで通り活動中です。

研究室のメンバーや最近の写真、研究室の業績については動態のホームページに随時更新していますので、ぜひご覧になってください(<http://doutai.phar.kyushu-u.ac.jp/> 参照)。卒業生の皆さま、お近くにお越しの際は、ぜひ研究室にお立ち寄りください。最後になりましたが、皆さまのご活躍とご健勝を一同心よりお祈り申し上げます。



## 臨床育薬学分野

卒業生の皆様、こんにちは。いかがお過ごしでしょうか？平成29年1月に九州大学病院薬剤部より助教として異動してきました川尻が、研究室の近況を報告させていただきます。

現在の研究室のメンバーは、教員3名(鳥添隆雄准教授、小林大介講師、助教の川尻雄大)と大学院生5名(課程博士1名、社会人博士4名)、学部学生13名(6年生5名、5年生5名、4年生3名)となっています。昨年度まで准教授としてご指導いただいた窪田敏夫先生は第一薬科大学に教授としてご栄転されました。今後益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

臨床育薬分野では、臨床現場に密接した役に立つ研究テーマを幅広く推進していく必要があります。これまでの研究テーマに加え、最近新たな研究テーマ(抗てんかん薬のTDMや抗がん剤の有害事象などに関する研究)も立ち上げ、教員・学生共に精力的に研究を行っています。テーマの詳細や研究業績等はホームページをご覧くださいと幸いです(最近リニューアルしました: <http://ikuyaku.phar.kyushu-u.ac.jp/index.html>)。また、臨床現場からのご意見や連携も今後重要なものになります。卒業生の皆様の中で、臨床現場に出て、「こういったことが問題になっています」や「こういった研究をしたいけど、現場だけではちょっと」などの声がありましたら、お気軽にご連絡いただけますと大変光栄です。

薬剤師に対する世の中の期待や求めるものが著しく変わり、大きく変わってきている今日、卒業生の皆様を取り巻く状況も大きく変化していると思います。それぞれにご多忙な日々が続くとは思いますが、ご健康にはご留意の上、各ご施設・各分野での先導的なご活躍を祈念しております。

毎年6月ごろに開催しています同門会で、またお会いできるのを楽しみにしております。



## 薬剤学分野

薬剤学分野の卒業生の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

薬剤学研究室は、2005年4月より大戸茂弘教授が着任し、「体内時計の分子機構を基盤にした創薬・育薬研究」とのテーマのもと、日々実験に取り組んでいます。2016年11月16日(水)～18日(金)には、九州大学医学部百年講堂にて第29回日本動物実験代替法学会の会長を大戸教授が務めました。「分子一細胞一個体の視点からの代替法」というテーマを掲げ、研究室一丸となって運営を行いました。また、研究発表には多くの学生が参加し、研究室の研究成果をアピールしました。

現在、薬剤学研究室は教授の大戸茂弘と昨年度より特任助教として楠瀬直喜が着任し、大学院生博士課程11名、修士課程7名、学部学生10名から構成されています。また、一昨年度まで薬剤学研究室の准教授と助教を務めていた小柳悟および松永直哉は、グローバルヘルケア分野の教授と准教授に着任し、薬剤学研究室と一丸となり教室運営を行っています。

続いて、メンバーの近況をお知らせします。博士課程4年の白水、3年の緒方(社会人)は、研究室のリーダーとして自身の研究・後輩の指導に取り組み、研究室を牽引しています。博士課程3年の片宗(社会人)、権藤、鶴田、鶴留、ヌル(留学生)、1年の山口(社会人)、吉田は研究者としての能力を磨くため日々研究に全力を注いでいます。薬剤師免許取得コースの博士課程1年の荻野、金堂は講義や実習に加え国家試験の勉強を行いながら、研究室の運営に携わっています。創薬科学科修士課程2年の岩本、田仲、中尾、村上是修士論文発表に向けて追い込み中です。修士課程1年の黒木、嶋岡、山口は自身の研究に加え、研究室行事の企画・運営と、充実した毎日を過ごしています。創薬科学科4年の北城、駒形、森は自身のテーマが決まり、先輩方の指導のもと卒業論文に向け取り組んでいます。臨床薬学科6年の羽山、森田は12月には卒業論文発表、3月には国家試験と多忙な中研究を行っています。臨床薬学科6年の神田、5年の柴田、安河内は病院実習・薬局実習で研修中です。臨床薬学科4年の糸山、田尻は講義・共用試験等で必死に勉学に励んでいます。

各々がそれぞれの研究テーマを持ち、日々奮闘している一方で様々な行事にも積極的に参加しております。2016年の春に行われたソフトボール大会では昨年に続き見事連覇を果たしました。2017年は文武両道の精神の元、前人未到の3連覇を達成したいと思います。

これからも「薬剤学教室」の伝統を継承しつつ、創薬・育薬の観点から新しい研究分野の開拓に邁進して参ります。卒業生の皆様も近くにお越しの際には是非気軽に当研究室にお立ち寄りください。また、当研究室のホームページを随時更新しておりますので是非ご覧ください(<http://yakuzai.phar.kyushu-u.ac.jp/>)。

最後になりましたが、皆様の益々のご健康とご活躍をお祈りいたします。

## 薬効安全性学分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

現在、薬効安全性学分野は黒瀬等教授、仲矢道雄准教授、長坂明臣助教のスタッフ3名に加え、学生15名(博士2名、修士6名、学部生7名)の計18名が在籍しており、心疾患、死細胞の貪食、組織の線維化など様々な研究テーマに向けて日々実験に取り組んでいます。

黒瀬教授は講義や学会などでご多忙な日々が続いておりますが、セミナーやミーティング等を通して学生に研究や発表への助言などコミュニケーションを大切にしてください。仲矢准教授はご多忙な中でも、学生の指導を熱心に行ってください、研究室に力強い風を呼び込んでくださっております。長坂助教は、ご自身の実験をこなすだけでなく、学生の指導及びサポートなど様々なことに尽力して下さっております。平成29年から、秘書として新たに高島さんが研究室をサポートして下さっております。また学生では、博士2年の大場さん、松田さんは、現在論文作成と多くの実験をこなすと共に、後輩の指導もして下さっております。学部6年の高山君は進路も決まり、国家試験に向けた勉強と

研究を頑張っています。修士1年の伊藤、永田、萩原、堀井は、それぞれの研究テーマの解明に向けて苦戦しながらも真剣に研究に取り組んでおります。学部5年の福山は、実習など薬剤師に向けた勉強に励んでおります。最後に学部4年は、創薬の上野、廣中、盛永、臨床の那須、間恵の5人で、創薬の3人は無事に院試を終え、5人とも真摯に実験を学びつつ自分たちのテーマに取り組んでおります。

以上、少数精鋭で世界トップレベルの研究を目指し日々頑張っています。卒業生の皆様方、お近くにお越しの際は研究室まで是非お立ち寄り下さい。研究室のメンバーや業績などの情報はホームページを是非ご覧ください。

皆様の益々のご活躍とご健康を心よりお祈り申し上げます。



## 蛋白質創薬学分野

蛋白質創薬学分野(旧免疫薬品学分野)を卒業された先輩の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

蛋白質創薬学分野では植田教授、阿部准教授、白石助教のご指導のもと、日々研究に励んでおります。テクニカルスタッフの吉富さんのタンパク精製技術もますます磨かれています。在籍している学生は、修士課程:池田、伊藤、宮原、井樋、柴田、前田、学部生:助信、吉田、上島、大坪、門脇、御供田、金、篠崎、西村、中園の16名で、日々賑やかに過ごしています。取り組んでいるテーマも多岐にわたり、抗体やDNA複製、アミロイドーシスなど様々なものを扱っています。各自テーマは違いますが、困ったときや行き詰ったときはともに支え合いながら実験に取り組んでいます。

平成29年から実験報告会にグローバルヘルスケア分野准教授のホセ先生が加わり、発表に使うスライドが全部英語になり、ホセ先生の英語での質問に受け答えしなければならなくなりました。また、タイから留学生がやってきたり、留学に行ったりと急速に研究室内グローバル化が進んでおります。そんなグローバル化の波に飲み込まれないように日々個々が研鑽しています。

また、研究だけでなくソフトボール大会やテニス大会などのスポーツ行事にも積極的に取り組んでいます。昨年のテニス大会では準優勝という好成績をおさめ、スポーツ王国の復興に向け、今年は優勝できるように研究室一丸となり練習に取り組んでいます。

平成29年は植田先生が教授に就任し、研究室ができてから15年目という節目の年です。また植田先生は来年還暦を迎えられます。在学生、スタッフ一同、この記念すべき年を盛り上げていきたいと思っています。どうぞ温かい目で見守っていただくと幸いです。

最後になりましたが、皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。



## 病態生理学分野

病態生理学分野は2016年10月に薬学棟2号館4,5階に引っ越ししました。培養室は1号館4階、というように、部屋がバラバラですが、同じ建物の中なので、会議に出るのも学生係があるサイエンスプラザへ行くにも外に出る必要がなく、結構便利になったと思っています。

准教授・野田百美の下に現在、在籍している学生は、博士課程の学生3名(1名は臨床)、修士課程2名、学部学生4名、研究生(中国人)1名、の10名です。

本研究室では、基本的に神経科学の分野で、神経保護に関する研究を行っています。さらに、酸化ストレスによる皮膚障害に対する保護効果についても研究を行っています。神経科学では、グリア細胞の研究と、新規メディカルガス・分子状水素(水素ガス)の神経保護作用の研究を継続して行っています。水素の方は、2016年末からネガティブキャンペーンとやらがあり、一部のバッシングのような記載が続いて、業界の一部は大層痛手を受けたようですが、健康な人が飲んで効果もわからないかもしれないものの、臨床的には次々に効果やそのメカニズムが報告され、相変わらず広く世間の関心を引き付けているようです。これは科学をやっている者でも、電気分解した水(機能水)とどこが違うのか、説明が難しいのですが、あくまでも分子状水素、つまり水素ガスが対象で、イオンでもラジカルでもありません。

グリア研究では、内分泌系の甲状腺ホルモンと脳内グリアの機能連関を目下、研究しております。カナダ・ケベックからの短期留学生を迎え(写真)、新生児の突然死と甲状腺ホルモンの欠乏がもたらす脳幹・呼吸中枢への影響について、グリア細胞を介した連関を探っているところです。

本研究室では、積極的に他の研究室との共同研究、研究会参加、および海外への出向を推奨しており、2016年秋から半年間、修士の学生・吉岡優作君が、トビタテ!留学JAPAN日本代表プログラムに当・薬学研究院から初めて採用され、ドイツ・ベルリンへ行って参りました。秋には、当研究院の留学プログラムで、臨床6年の山本美樹さんが台湾へ短期留学しております。

卒業生の皆さま、お近くにお立ち寄りの際は、どうぞお気軽にお越しください。(執筆、野田百美)



病態生理学分野のメンバー(2017年10月4日)。  
カナダ人学生の歓迎会にて。

## 分子生物薬学分野

はじめまして、分子生物薬学分野 修士課程1年の内野莉加子と申します。今年は私が研究室紹介をさせていただきます。

平成29年10月現在のメンバー紹介です。片山勉教授は論文執筆、会議や出張等でもいつもお忙しいのですが、時間を作って熱心に教育指導をしてくださり、適切なアドバイスをくれます。パーゼル大に6年間留学された尾崎省吾先生は、10月に就任されたばかりですが、新しい提案を私たちにしてくれます。また、実験のご指導以外でも留学先でのお話などを聞くことができ、刺激になっております。川上広宜先生は、多くの仕事をされている中で、実験がうまく行かないときなど親身に相談にのってくださいます。加生和寿先生はいつも冷静で、方向性を見失わないようにご指導してくださいます。加生先生は学振の海外特別研究員に採用され11月からスウェーデンへの留学が決まっております。学生は臨床D4の井上、創薬D3の崎山、創薬D2の谷口、M2の川畑、酒井、杉山、M1の内野、江頭、臨床B6の鈴木、創薬B4の栗原、林、三善、臨床B4山口、横山、研究生の盧です。

私たちは、主に大腸菌と出芽酵母の染色体複製開始制御についての研究を行っています。今年度は論文や総説を4報投稿しており、今月は崎山さんが第一著者となって、大腸菌の複製開始複合体が二重鎖DNAを一本鎖化する機構を解明した論文が採択されました。この機構は真正細菌に共通の原理と思われる重要です。また、片山先生が2017年日本遺伝学会で木原賞を受賞し、記念講演を行いました。今年度は先生の受賞を記念して同門会を行う予定です。

今年度の講座旅行は一泊二日で壱岐に行きました。壱岐牛や海鮮などの豪華な食事と、海でのマリンスポーツや辰の島遊覧を楽しみ、最後は酒蔵見学と充実した内容でした。

このように、分子生物薬学分野では日々切磋琢磨しながら研究を進めております。最後になりましたが、先輩方の更なるご活躍と発展をお祈り申し上げます。

## 分子衛生薬学分野

寒い日が続きますが、卒業生の皆様はいかがお過ごしでしょうか。分子衛生薬学分野の紹介をさせていただきます。今年度は4月に吉村英敏先生の卒寿祝賀会を開催しました。当日は、多くの卒業生の皆様にお集まりいただき、盛況のうちに終えることができました。山田英之先生ご逝去後に残された私たちに、大先輩の方々からの温かくも厳しい激励のお言葉をいただき、貴重な機会となりました。この場をお借りして、ご参加いただきました皆様に御礼申し上げます。それでは、研究室のメンバーの近況です。石井准教授は、4月より日本学術振興会・基盤研究Aに採択されています。授業でお忙しい日々の中、以前にもまして学生の指導に力を注がれ、研究室を牽引されています。武田助教は、学生一人一人に親身に指導を行う傍ら、論文の執筆にも取り組まれています。これまで精力的に行ってきた研究が実を結び、日本薬学会九州支部、日本毒性学会および日本薬学会環境・衛生部会にて賞を受賞されました。今年度は、3人の学部学生と1名の社会人博士、2名の中国からの留学生が新メンバーとして加わり、17名の学生が当教室に所属しています。「ダイオキシン類による次世代影響」と「薬物代謝酵素の機能的連携」という二大テーマをさらに深めるとともに、それらを融合させることを目指して、細胞生物薬学分野との協力体制もとりながら日々研究に従事しています。多くの大型機器がそろった充実した環境の中で、それらを使いこなすために奮闘する毎日です。3月に卒業を予定する7名は、卒業論文に向けてラストスパートです。それ以外の学生も、実験に講義に実習にと多忙な日々を過ごしています。留学生の受け入れでグローバル化が進み、日本語、英語、中国語と多様な言語が飛び交う中で、これからも皆で切磋琢磨し、活気ある研究活動を行っていく所存です。最後になりましたが、卒業生の皆様の益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。



講座旅行で訪れた別府海地獄にて

## 生体分析化学分野

卒業生の皆様はいかがお過ごしでしょうか。現在、当研究室では王子田教授をはじめとするスタッフの先生方の手厚い御指導のもと、日々研究に励んでいます。

研究室の近況を報告させていただきます。まずプローブ組は内之宮助教のもと、D3の川越さん、D1の花房さんを中心とする計7人のメンバーで研究を進めており、現在は生体内代謝の可視化や新しい蛍光

センシングメカニズムに基づく蛍光プローブの開発を目指したケミカルバイオロジー研究を大胆に展開しています。タグ組のM2の倉重さん、M1の善明さんの2人はタグ・プローブペアによるタンパク質ラベル化を応用した電子顕微鏡でのタンパク質の一分子可視化を目指したちょっとマニアックな研究を行っています。コバレントドラッグ組は進藤助教、D3の潤田さん、D2の佐藤さんをはじめとする臨床薬学科の学生を含めた、計12人のメンバーで研究を進めており、コバレントドラッグのための新しい有機化学の開拓や反応性化合物ライブラリーの構築によるコバレントドラッグ探索などチャレンジ性あふれる新しい創薬化学研究を展開しています。

本年度の話題としましては、秋から中国から郭さん、デンマークからMarkさんが修士学生として加わり、さらに留学生としてタイからOouさんが三ヶ月間滞在するなど、国際色豊かな研究室となっています。M2の倉重さんは博士後期課程への進学が決まり、新しい研究に向けて益々研究に励んでいます。また、今年度の10月に開催されたメディスナルケミストリーシンポジウムでは優秀賞受賞者として助教の進藤さんが特別講演を行いました。今後の研究の発展が期待されています。研究室の詳細はHP (<http://bunseki.phar.kyushu-u.ac.jp>) からご覧いただけます。最後になりましたが、卒業生の皆様は近くにお越しの際はお土産を持って気軽に研究室まで足をお運びください。皆様の益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。



## 環境調和創薬化学分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。2010年4月より始動した当研究室は今年で8年目を迎えました。大嶋教授を筆頭に、教員・スタッフ5名、博士課程7名、修士課程6名、学部生7名、研究生1名の総勢26名で研究に励んでおります。現在、当研究室では環境調和型触媒反応の開発・不活性官能基の活性化・生物活性化合物の合成を軸に研究を行っています。学会発表や執筆活動も活発に行い、先輩方から引き継いだ成果が着実に形となってきています。

さて、続いて研究室の近況を述べさせていただきます。大嶋教授は今年度、International Symposium on Pure & Applied Chemistry (ISPAC) 2017にて the ISPAC 2017 Lecture Awardを受賞され研究にご尽力なさる一方で、2月に開催される北九州マラソンに参加されるなど、あらゆる事に全力で取り組んでおられます。豊富な知識を誇る森本講師は、様々な知見からアドバイスをくださるありがたい存在です。矢崎助教は、毎朝誰よりも早く出勤して研究に勤しんでおり、研究者としての見本となる存在です。また、森本講師、矢崎助教は昨年度ご結婚され、研究室に幸せが溢れています。渡辺特任助教は、寡黙に研究に取り組まれる一方で、学生と共に学内テニス大会に参加されるなど親しみやすい存在です。秘書の有村さんは、研究室の雰囲気をつんわりと和ませてくれる貴重な存在です。

一方、学生は皆で協力し、切磋琢磨しながら研究生生活を送っています。研究室を引っ張る兄貴・姉貴分D3澤、野下、頼りになるD2中武、堀河、辛、ビール通D1米嵩、おっとりしたD1 walaa、勤勉なM2田中尊、谷之口、出口、努力家M1近藤、田中津、ユニークなB6久保、若さ溢れるB4田淵、橋口、松本、宮崎、蔵園、平澤、奥ゆかしい研究生の劉。新顔が増え、研究室も非常に活気のあるものとなっています。

以上、簡単ではございますが、環境調和創薬化学分野の近況を報告させていただきました。最後になりますが、卒業生の皆様も近くにお越しの際は、研究室までお気軽に足をお運び下さい。

## 生薬学分野

卒業生の皆さま、いかがお過ごしでしょうか？

生薬学分野では、森元教授、田中准教授、坂元助教のご指導のもと、総勢11名の学生が日々研究に取り組んでいます。現在は主に、植物成分の生合成・代謝経路の解明や、植物成分の迅速かつ簡便な分析法の確立をテーマとした研究を行っております。

当研究室では、常に留学生が滞在し、日常から英語の飛び交う国際性の高い研究室となっております。また、1～2ヶ月に一度のペースで薬草園掃除を行います。普段から先生方がしっかりと手入れをされており、薬用植物を実際に目で見て観察できる貴重な施設となっております。

続いて学生の紹介をします。修士2年生の和田さん、小松さんは非常に仲が良く、隣同士の席に座って作業をしています。二人とも口数が少ない方なのですが、大事な時にはいつも貴重なアドバイスをくれる頼りになる先輩方です。臨床6年生の川上さんは国家試験を3月に控え、11月には卒論発表もあるということで大忙しな毎日を送っています。そんな川上さんは、毎週木曜日の掃除では誰よりも気合いを入れ、塵一つないピカピカな部屋にしてくれています。修士1年の衛藤くんは薬学部一のファッションistaで、毎日私たちは衛藤くんの服装、髪型のインパクトに驚かされています。同じく修士1年の森田さんは絶世の美女という肩書を持っていますが、どこか抜けているところがあり、その天然ぶりに私たちは呆気にとられています。臨床5年生の磨田さんは実習のため研究室にいないのですが、時々顔を出しに来てくれます。4年生は大変賑やかなメンバーが揃っています。南くん、内山くんはテニスの有名人で、松浦くんは時々一発芸で皆を笑わせてくれます。しっかり者の杉山さん、明るい性格の山口さんの女子トークは見ているとほっこりします。

以上、簡単ではありますが、生薬学分野の近況を報告させていただきました。卒業生の皆さま、お近くにお越しの際には是非お立ち寄りください。

## 細胞生物薬学分野

卒業生の皆様、お変わりなくお過ごしでしょうか？

平成28年の11月に細胞生物薬学分野の助教として着任いたしました、宮内と申します。私は平成27年に分子衛生薬学分野で学位を取得し、一年半の米国留学を経たのち、当研究室に赴任いたしました。微力ですが、研究室ならびに研究院の発展に尽力していきたいと思っておりますので、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

さっそくですが、細胞生物薬学分野の近況報告をさせていただきます。一同は、田中嘉孝教授のご指導の下、日々実験に励んでいます。現在は、1) 膜タンパク質の輸送および分解の分子制御機構の解明、2) リソソームによる分解機構の解明、を中心に研究しています。教員は私を含めて4名です。教授の田中先生は講義の準備や研究の指導などお忙しい毎日をお過ごしされています。私が学生のころに想像していたよりも、はるかに軽いフットワークの良さに驚かされてばかりです。助教は廣田先生と藤本先生です。廣田先生は産休から復帰され、仕事と子育ての両立が大変です。同じ年頃の子供を持つ身としては、常に頭が下がる思いです。藤本先生はご自身の研究と学生の指導に余念がありません。教員の見本にさせていただいております。多忙な教員の面々ですが、癒しの存在は廣田先生の娘さんです。折を見てエネルギーをチャージさせてもらっています。学生は全部で9名です。6年生の真栄里君、宮永君は卒業発表の準備に頑張っています。何とか無事に乗り切ってほしいものです。修士1年生の多田君、高原さん、5年生の黒原君は実験に講義にと頑張っています。同時に幹事学年として研究室のイベントを管理してくれています。学部4年生の宮本君、林君、山崎君、木村さんは研究を始めて日は浅いですが、これからの成長を期待しています。以上のメンバーで今後も元気のある研究室にしていきたいと思っております。近くにお越しの際はぜひ、当研究室にお立ち寄り下さい。

最後になりましたが卒業生の皆様におかれましては、ますますの御繁栄をお祈りすると共に、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



## 生命物理化学分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか？当研究室では、山田教授をはじめとする先生方のご指導の下、日々研究に励んでいます。

山田教授は、学会など多くのスケジュールでご多忙ながらも、日々のディスカッションやセミナーを通して、学生とのコミュニケーションも大切にしてくださっています。

今年から新たに大和特任准教授、テクニカルスタッフの垣野さんが加わったことで、物化に新しい風を運んでいただいております。松岡助教は日々忙しく実験のことから日常生活のことまで後輩に熱心なご指導をさせていただきます。秘書の菱山さんは、研究室の雰囲気をもふわりと和ませてくれる貴重な存在です。

さて、研究室のメンバーを簡単に紹介いたします。D2の日下部さんは、親身になって様々なアドバイスをさせていただきます。薬剤師ドクターコースの荒木さん、石田さん、進藤さん、森さんは授業と研究を両立されており、CBTに向けて忙しく過ごされています。M2の多田さん、三倉さんは支部会に向けて精力的に実験をされています。6年生の大塚さんは実験に国試にと充実した日々を送っています。M1の生津、北島、白石、宗は幹事学年として研究室の仕事に追われつつも、昼夜実験に明け暮れる日々でございませう。5年生の安達、岡本、塚田は薬局実習・病院実習に励んでおります。4年生の阿部、石田、齋藤、廣石、森は5人とも個性的なキャラクターで、研究室に光をとます存在です。

この夏、講座旅行で阿蘇へ出かけ、牧場やトレッキングを楽しみました。自然やかわいい動物たちと触れ合って、日々の疲れをリフレッシュしました。

これから年度末に向け、それぞれ卒業や進級、国家試験など、目標に向けてより一層に努力してまいります。卒業生の皆様におかれましては、ご多忙な日々をお過ごしのことと存じますが、近くにお越しの際には是非当研究室にお立ち寄りください。



## 創薬育薬産学官連携分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。創薬育薬産学官連携分野は浜瀬健司先生を分野長として、キラルアミノ酸を切り口とした創薬・育薬の発展や早期診断法の開発、機能性食品の開発、アンチエイジング研究などを行っております。本分野では大変喜ばしいことに、准教授であった浜瀬先生が昨年度の6月に教授に昇任されました。より一層活躍の場を広げられ、今では国際化推進の立役者として東南アジアを中心に世界を飛び回り、ご多忙な毎日をお過ごしされています。また、助教の秋田健行先生が着任されたことで研究の幅が格段に広がり、本分野の発展が益々期待されます。昨年には資生堂との共同研究ラボとなるキラルアミノ酸ソリューションセンターもグリーンファルマ研究所内にオープンし、三次さん、益山さん、石郷さんが勤務されています。当研究室では国際化も率先して行っており、台湾やタイ、マレーシアなど様々な国へ研修に行く機会を多く与えて頂いております。更に世界各

国から留学生も積極的に受け入れており、日本にいながらも英語での活発なコミュニケーションが繰り返されています。

研究室では浜瀬先生、秋田先生のご指導の下、秘書の北田さん、研究員のNutchayaさんと共に総勢22名で日々研究に勤めています。学生としては、薬剤師Dの才津さん、M2の石井さん・植木さん、B6の伊豆さん・小川さん・筒井さん、M1の酒井さん・謝さん・趙さん・高橋さん・古庄さん、B5の岩下さん・上村さん・吉田さんに今年度から田中君・吉岡君・佐藤根さん・二井屋田さんが加わり一層賑やかとなりました。

最近の話題としては、M2の石井さんがChromatography Outstanding Student Paper Award 2017を、M1の謝さんが第24回クロマトグラフィーシンポジウムにて優秀発表賞を、M1の古庄さんが第35回九州分析化学若手の会夏季セミナーにて九州分析化学若手賞を受賞しました。詳しくはHP (<http://soyaku.phar.kyushu-u.ac.jp/>)でもご覧になれますので宜しくお願い致します。以上、研究室の紹介とさせていただきます。お忙しいとは存じますが、近くにお越しの際は是非お立ち寄りください。

## ■ ■ ■ ライフイノベーション分野 ■ ■ ■

酷暑もようやく終わり、いよいよ秋めいてきたこの頃、卒業生の皆様方はいかがお過ごしでしょうか。当研究室では津田教授、齊藤准教授、高露助教、白鳥助教のご指導のもとチーム一丸となり、日々研究に邁進しております。

現在ライフイノベーション分野は、グリーンファルマ研究所で9チームに分かれ、楽しく実験しております。

ポストドクの越智さんは今年度より岡山大から来られました。博士4年の山本さんは飲み会リーダーとして、博士3年の古賀さんは子供心を忘れず、また博士3年の松田さんは焼肉リーダーとして研究室を盛り上げてくれています。博士2年の田島さんは実験室に響き渡る笑い声で、博士1年の河野さんは健康的な肌色と白い歯で研究室を明るくしてくれています。皮膚科から来られた博士1年の村田さんは皆の皮膚の健康を守ってください、社会人博士の吉永さん、鮎川さんも含めた計8人の博士学生で頑張っています。他のメンバーは、修士2年のお茶目で小顔な兼久さん、顔の大きめな八田さん、おにぎり大好き関根さん、色白な遠山さん。学士6年の元気ハツラツ棟田さん、クイズ大好き川浪さん。修士1年の趣味は筋トレ江口、努力家吉原、盛癡激しい山根、おちょこちょい驚頭。学士5年の声が大きい伊藤、声が小さい原田。学士4年のユニクロ大好き岡田、見た目はいい山方、不思議ちゃん笹木、妹キャラ渡邊、悪酔い松川です。修士2年兼久さん、学士4年の岡田、山方、笹木、渡邊はそれぞれ来年度から大学院博士課程、修士課程進学が決まり日々研究に励んでいます。また、我々を陰で支えてくださっているのが、秘書の末宗さんと福迫さんです。

こんな感じで、ライフイノベーション分野総勢32名で頑張っています。諸先輩方、もし大学にお越しになる機会がございましたら、ぜひ研究室にお立ち寄りください。

## ■ ■ ■ 生物有機合成化学分野 ■ ■ ■

卒業生の皆さま、いかがお過ごしでしょうか?生物有機合成化学分野は佐々木教授をはじめとする先生方のご指導のもと総勢約20名で、日々熱心に研究に取り組んでいます。

学会や講義等でご多忙な佐々木教授は、平成29年度薬学会賞を受賞され、受賞講演では先輩方のお写真を交えて成果をお話し頂きました。薬学会賞の受賞は九大薬有機系としては兼松顕先生以来という嬉しいニュースとのことです。谷口准教授は佐々木教授の右腕として研究のバックアップと運営を担い研究室をまとめるだけでなく、ご自身の研究を活発に展開され、「平成29年度日本核酸医薬学会奨励賞」を受賞されました。この賞は新設学会の栄えある第1回目の表彰でした。一児の母である阿部助教は育児と研究の両立と奮闘しておられ、学生に最も近い年齢である瀧助教は、非常に親身なアドバイスで学生を引っ張っておられます。

3本鎖グループは現在4人で3本鎖形成の最適化を目指した人工核酸の開発をしています。8-oxo-dGや8-Nitro-Gの検出や新規8-oxo-dG誘導体の開発を目指す酸化損傷グループは、6人で日々研究に取り組んでいます。機能性核酸グループは学生4名に加え新たに技術補佐員や博士研究員を迎え、RNA修飾法の確立に向けて尽力しています。低分子グループは3人の少数精鋭でDNA結合分子の開発に努めています。

また、夏から秋にかけてマレーシアやタイより交換留学生が来日し、8月の壱岐での講座旅行ではマリンスポーツを一緒に楽しみました。生物有機からも2名が短期留学しマレーシア及び台湾で頑張っています。そのため今では日常的に英語が飛び交う国際色豊かな研究室の雰囲気になっています。

卒業生の方々の業績・精神を受け継ぎ、互いに切磋琢磨して各々の目標に向かって邁進していきたいと思えます。最後になりましたが、卒業生の皆様のますますのご活躍とご健康を心よりお祈りいたします。来福の際には気軽に研究室にお立ち寄りください。



## ■ ■ ■ 薬物分子設計学分野 ■ ■ ■

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。薬物分子設計学分野の近況をお知らせいたします。当分野では、2016年3月に末宗洋教授が退職なされ、9月に理化学研究所より平井剛教授が着任されました。また、今年度より森田昌樹特任助教が着任され、有機化学・生物学の知見を利活用した生物活性分子を創り出す研究に励んでいます。

ここでメンバーの近況を報告させていただきます。平井教授は出張、講義など多忙を極められておられるなか、学生とのコミュニケーションや研究室全体への配慮は欠かせません。最近、九州のうどんの味(食感?)に慣れるためにうどん活動をされているようです。麻生准教授は、ご指導はもちろんのこと、数々の学術論文も投稿されいっそう精進されています。中性脂肪が絶賛上昇中の白井助教は、少しの運動と大量のサプリで健康な体を取り戻しつつあります。痩せの大食い森田特任助教は、日々黙々と実験をこなしながら、的確なご助言により学生を活気づけてくれています。

続いて学生の紹介です。博士課程2年の湯永さんは、来年3月に薬剤師国家試験を控え、日々勉学に励んでいます。修士課程2年の木室君、長門石君、横尾君は修士論文発表に向けて追い込み中です。修士課程1年の木谷君、水野君は自身の研究だけでなく下級生の実験指導なども積極的に行っております。木谷君は、化学関連支部合同九州大会において優秀発表賞を受賞しました。創薬科学科4年の郭君、上蘭君、森田君、丸野君、そして院試トップの日高君は研究者としてのスタートを切っています。臨床薬学科4年の大野さん、6年生の太田さん、三宅さん、光岡君は国家試験に向けた勉強の合間をぬって実験に励んでいます。

この春には、研究室の改修工事を行い新しい実験台とドラフトも導入され、部屋の環境が様変わりし快適になりました。どうぞ、この変化を体験しに、ご来福の際には研究室に是非お立ち寄りください。未筆ではありますが、皆様の益々のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

(文責・白井一晃)



## ■ ■ ■ 医薬細胞生化学分野 ■ ■ ■

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。研究室の近況を修士1年の岩村がご報告させていただきます。当分野では、藤田教授、宮本准教授、田中助教、杉本助教、吉田助教のご指導の下、「染色体機能制御の分子機構解明とその制がん研究への応用」及び「分子標的薬を含めた創薬のリソースとしての天然化合物研究」のテーマの元で、日々研究に励んでいます。

それでは簡単に研究室のメンバーの紹介をさせていただきます。藤田教授、宮本准教授、田中助教、杉本助教、吉田助教、D3が2名、D1が1名、M2が3名、B6が1名、M1が4名、B5が2名、B4が4名の総勢22名です。D3のホイさんは、この秋で卒業して故郷に帰ることが決まっております。現在は研究の仕上げを行っております。同じくD3のキンケラさんは、博士論文に向けて、休日返上で活発に実験に取り組まれています。D1の比嘉さんは、博士課程へと進学し、時々お酒に溺れつつもますます研究に励んでいます。M2の都築さん、森井さん、そしてB6の申山さんは全員無事に就職先も決まり、現在は修論、卒論作成に向けて昼夜実験に励んでいます。同じく、M2の高藤さんは、博士課程への進学を志し、先生と熱く議論を交わしております。M1の石本、岩村、比嘉、横山は就職活動に怯えながらも動き出し、また、着実に研究を進めています。B5の岩淵、奥山は、すでに薬局実習を終え、現在は病院実習に毎日励んでおります。B4は、三小田、藤田、藤山、松田の4人で、それぞれが爆発的な個性を發揮しつつも、自分の実験を一生懸命こなしています。

研究だけでなく、薬学ソフトボール大会に参加したり、夜には集まったメンバーで飲みに出たりと充実した研究室生活を満喫しています。また、夏には講座旅行で山口・広島を訪れ、素晴らしい思い出を築きました。

私たちは今後とも研究に、日々精進していく所存です。これからも当研究室をよろしく願っています。

## ■ ■ ■ 臨床薬物治療学講座 ■ ■ ■

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。当研究室では、教授の増田先生、准教授の江頭、薬剤師の山本先生と田島先生、社会人博士課程学生5名、修士課程学生2名、中国人留学生2名および薬学部4年生2名のメンバーで、研究に取り組んでおります。現在、当研究室の主な研究内容は、薬効・毒性のバイオマーカー探索と臨床応用、薬物毒性の発現機序解明と対策法確立、ファーマコゲノミクスと個別化投与設計法の確立、および薬物治療における変動要因の解明で、医療現場における諸問題の解決や薬物による有害反応のメカニズム解明を通じて、医薬品の適正使用法確立を目指して研究を行っております。

どうぞこれからも、皆様からのご支援とご指導をお願いすると共に、皆様の今後益々のご健勝を心よりお祈り申し上げます。



## ■ ■ ■ 創薬育薬研究施設統括室 ■ ■ ■

皆様、初めまして、創薬育薬研究施設統括室、特任助教の西山でございます。当分野はグリーンファルマ研究所の4階に居室を構え、西田基宏教授の下、創薬研究に取り組んでおります。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、西田基宏教授は九大初のクロスアポイントメント教授であり、自然科学研究機構岡崎統合バイオサイエンス・心循環シグナル部門も兼任しておられます。当分野は2015年9月より新設された分野であり、平成29年で2年目を迎えました。平成29年6月より、特任助教の西山および学術研究員の赤司が新たに加わり、日々研究に精進しております。

このあたりで学生との楽しい思い出を書きたいところですが、今まで常駐のスタッフが居なかったため、未だ学生が配属されていません。

来年度には是非とも、岡崎国立研究所と連携・融合できる、幅広い視野とチャレンジ精神をもった学生に配属していただきたいです。連携先の岡崎統合バイオサイエンス・心循環シグナル部門では富田助教、西村特任助教、研究員1名、大学院生2名（うち1名は九大薬出身）が在籍し、日夜研究活動に勤まっています。共同研究も活発で、他大学の大学院生や外国人留学生も頻りに出入りしています。最近、研究成果が、「抗がん剤で心筋が委縮する機序を解明 ～抗がん剤の副作用軽減に期待～」という見出しで新聞各紙に掲載されました。こうした成果を基に当分野では心循環恒常性の機能維持を主眼とする新薬開発（創薬）や既承認薬の適応拡大（育薬）を目指した研究を積極的に進めています。

最後になりましたが、卒業生の皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。お近くに来られた際にはぜひ研究室にお立ち寄りください。これからも当研究室をよろしく願っています。（文責 西山和宏）



## ■ ■ ■ 創薬腫瘍科学講座 ■ ■ ■

皆様いかがお過ごしでしょうか。

私共の創薬腫瘍科学講座は平成19年5月に開講して以来、早11年目となりました。現在の教室員は特任教授1名、准教授1名、学術研究員1名、博士2年1名、共同研究員2名、秘書1名の総勢7名ですが、毎日懸命に研究に励んでおります。小野先生は論文作成や実験指導、授業、国内外の学会活動に多忙な毎日を送っております。学術研究員の柴田君は、これまで以上に精力的に研究に取り組んでおり、平成29年1月には筆頭著者としてCancer Researchに論文発表を行いました。一昨年度より当研究室で一緒に研究を行っている博士課程2年の日下部君はやっとこちらの研究にも慣れ、現在は積極的に実験や勉強に励んでおります。共同研究員の村上先生と伊藤先生も毎日実験指導や自身の研究に励んでおります。

創薬腫瘍科学講座の研究の目標は、ベンチでの成果をがん患者に反映させる基礎臨床融合の研究連携体制のもとに研究を進展させることです。現在、がんの悪性進展に関与する標的分子を“がん微小環境を構成する非がん細胞”と“がん細胞自身”の両方に注目して研究を行っております。すなわち、がんの悪性進展や薬剤耐性に関与するメカニズムを明らかにしながら、独自の標的分子や標的細胞を明らかにすることでがん治療に貢献することを目指して研究を推進しております。さらにはがん悪性進展に関する我々の分子腫瘍学研究に加えて、分子病理学や臨床腫瘍学、さらにバイオ統計学の研究分野と協力して臨床的に有用性のある標的分子を同定して創薬へ結び付けていくところが、私共のがん創薬研究の大きな特徴です。

平成29年6月14～16日に小野先生が会長として九州大学医学部百年講堂にて“第21回日本がん分子標的治療学会学術集会”を開催いたしました。多くの薬学部の先生方や学生、また本講座の卒業生から多大なご支援とご協力を頂き、過去最多の参加者数で盛会裏に終了いたしました。ご参加頂きました多くの先生方に労いとお褒めの言葉を頂きましたのも、ご協力頂きました皆様方のお陰と心より御礼申し上げます。

どうぞこれからも、皆様方からの“創薬腫瘍科学講座”へのご支援とご指導を宜しくお願い申し上げます。

### 第21回 日本がん分子標的治療学会学術集会

がん分子標的治療にいま求められている新しい使命



## 叙位・叙勲

小嶋 正治 (故) 名誉教授：  
〔叙位〕正四 平成27年12月17日

渡辺 繁紀 (故) 名誉教授：  
〔叙勲〕瑞宝中綬章 平成29年3月31日  
〔叙位〕正四 平成29年3月31日

山田 英之 (故) 元教授：  
〔叙勲〕瑞宝小綬章 平成28年2月22日  
〔叙位〕従四 平成28年2月22日

## 受賞

### 教員・学術研究員

白井一晃 (薬物分子設計学)：宇部興産学術振興財団 第56回学術奨励賞 2016/6/14 ヘリセン類のらせんキラリティーに立脚した触媒的不斉変換反応

白井一晃 (薬物分子設計学)：平成28年度 日本薬学会九州支部学術奨励賞 2016/12/3 螺旋空間を利用した新規不斉リン配位子の開発と不斉触媒反応への応用

白井一晃 (薬物分子設計学)：平成28年度 有機合成化学協会「コニカミノルタ研究企画賞」2017/2/16 結晶構造と機能に着目した蛍光性ヘリセン分子の設計と精密合成

平井 剛 (薬物分子設計学)：平成29年度 長瀬研究振興賞 2017/4/1 3位修飾型シアロ糖鎖アナログの効率的合成とシアリダーゼ阻害剤への展開

武田知起 (助教) (分子衛生薬学)：メチル水銀研究ミーティング 若手研究奨励賞 2016/1/7 メチル水銀の妊娠初期飲水曝露が胎児のメタボロームに及ぼす影響と性差

武田知起 (助教) (分子衛生薬学)：日本薬学会九州支部学術奨励賞 2016/12/3 ダイオキシンによる出生児の性未成熟の分子機構

武田知起 (助教) (分子衛生薬学)：日本毒性学会 奨励賞 2017/7/11 内分泌攪乱物質の妊娠曝露による次世代影響の機構ならびに評価法への応用

石井祐次 (准教授) (分子衛生薬学)：日本毒性学会 田邊賞 2017/7/11 Demethylation of methylmercury and the enhanced production of formaldehyde in mouse liver.

武田知起 (助教) (分子衛生薬学)：日本薬学会 環境・衛生部会 部会賞・金原賞 2017/9/1 メタボロミクスを基盤とする解析を通じた化学物質の毒性発現機構の解明。

武田知起 (助教) (分子衛生薬学)：平成29年度 内外環境応答・代謝酵素研究会 最優秀発表賞 2017/9/10 ダイオキシンによる次世代影響に関する研究

大嶋孝志 (環境調和創薬化学)：Asian Core Program/Advanced Research Network Lectureship Award (The 10th International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia (ICCEOCA-10)/The 1st Advanced Research Network on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia (ARNCEOCA-1)) 2015/11/5 Direct Catalytic Chemoselective Amination: A Concise Route to  $\alpha$ -Amino Acid Derivatives

渡辺賢司 (環境調和創薬化学)：味の素研究企画賞 (有機合成化学協会2015年研究企画賞) 2016/3/5 水中で進行するベンジル位チオール化反応の開発及び中分子合成への適用

大嶋孝志 (環境調和創薬化学)：Asian Core Program/Advanced Research Network Lectureship Award

(Taiwan) (The 11th International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia (ICCEOCA-11)/The 2nd Advanced Research Network on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia (ARNCEOCA-2)) 2016/10/27 Zn-Catalyzed Direct Alkynylation of N-Unprotected Trifluoromethyl Ketimine

大嶋孝志 (環境調和創薬化学)：International Symposium on Pure & Applied Chemistry (ISPAC) 2017 Lecture Award 2017/6/10 Direct Catalytic Asymmetric Addition to N-Unprotected Ketimines

進藤直哉 (生体分析化学)：第34回メディシナルケミストリーシンポジウム、メディシナルケミストリーシンポジウム優秀賞 2016/12/2 コバレント阻害剤の標的特異性向上を目指した新規反応性基の探索とEGFR阻害剤への応用

谷口陽祐 (生物有機合成化学)：平成28年度有機合成化学協会九州山口支部奨励賞 2016/5/16 フェノキサジン環を有する核酸誘導体の開発と酸化損傷塩基のピンポイント認識

佐々木茂貴 (生物有機合成化学)：平成29年度薬学会賞 2016/11/17 ゲノム標的の化学的展開による機能性分子の創成

谷口陽祐 (生物有機合成化学)：日本核酸医薬学会奨励賞 2017/6/1 アンチジーン核酸創薬を志向した非天然型3本鎖DNA形成可能な核酸誘導体の開発

山田健一 (生命物理化学)：第69回日本酸化ストレス学会学術集會学術賞 2016/9/1 脂質ラジカル検出手法の開発と疾患モデルへの応用

松岡悠太 (生命物理化学)：第29回バイオメディカル分析科学シンポジウム星野賞 研究奨励賞 2016/9/6 アスコルビン酸の迅速かつ高感度な検出に向けた長波長蛍光ニトロキッド化合物の開発

長坂明臣 (薬効安全性学)：第90回日本薬理学会年会 年会優秀発表賞 2017/3/17 心筋梗塞時におけるプロトン感知性受容体 TDAG8 の役割解析

高露雄太 (ライファイノバージョン)：第38回日本生物学的精神医学学会・第59回日本神経化学会大会合同年会優秀発表賞 2016/9/26

白鳥美穂 (ライファイノバージョン)：公益財団法人井上科学振興財団第33回井上研究奨励賞 2017/2/3

片山 勉 (分子生物薬学)：日本遺伝学会木原賞 2017/9/14 大腸菌をモデルとした染色体複製開始の分子機構と制御システムに関する研究

小柳 悟 教授 (グローバルヘルスケア分野)：日本学術振興会 科学研究費助成事業 平成27年度「科研費」審査委員 表彰 2016/1/27

### 学生

清水貴士 (院生) (薬物分子設計学)：第32回日本薬学会九州支部大会 優秀発表賞 2015/11/28 らせん性配位子を用いる不斉鈴木-宮浦カップリング

木谷憲昭 (院生) (薬物分子設計学)：第54回化学関連支部合同九州大会 優秀発表賞 2017/7/1 ラジカルカップリング反応を基盤とする炭素連結型2糖アナログの合成研究

江越菜月 (院生) (分子衛生薬学)：日本薬学会九州支部 優秀発表賞 (第32回日本薬学会九州支部大会) 2015/11/28 シトクロムP450 3A4とUDP-グルクロン酸転移酵素1A7の相互作用：機能的タンパク質間相互作用および物理的連携の解析

塩路優子 (学部生) (分子衛生薬学)：日本薬学会 環境・

衛生部会 実行委員長賞 (新人) (フォーラム2016:衛生薬学・環境トキシコロジー) 2016/9/10 Aryl hydrocarbon receptor (AhR) の欠損ラットを用いた肝臓および血液のメタボロミクス:代謝・排泄能における AhR の役割

西田恭子 (院生) (分子衛生薬学):日本薬学会 環境・衛生部会 実行委員長賞 (フォーラム2016:衛生薬学・環境トキシコロジー) 2016/9/10 ダイオキシンによる出生児の性未成熟の機構:ゴナドトロピン放出ホルモン神経への影響

服部友紀子 (院生) (分子衛生薬学):日本薬学会 環境・衛生部会 優秀若手研究者賞 (フォーラム2016:衛生薬学・環境トキシコロジー) 2016/9/10 ダイオキシン母体曝露による胎児期特異的な成長ホルモン産生細胞数の減少とその分子機構

栗田歩実 (院生) (分子衛生薬学):日本薬学会九州支部 優秀発表賞 (第33回日本薬学会九州支部大会) 2016/12/3 マウス肝の全UDP-グルクロン酸転移酵素分子種の包括的特性評価

内川拓也 (院生) (分子衛生薬学):日本毒学会 田邊賞 2017/7/11 Demethylation of methylmercury and the enhanced production of formaldehyde in mouse liver.

服部友紀子 (院生) (分子衛生薬学):2017 Japan/Korea Joint Symposium on Pharmaceutical Health Science and Environmental Toxicology: Best Poster Awards 2017/9/1 A dioxin-induced attenuation in the fetal expression of growth hormone: A search for novel factors which imprint the low growth of offspring produced by maternal exposure to dioxin.

森崎一宏 (博士) (環境調和創薬化学): Outstanding Oral Presentation Award (5th Junior International Conference of Cutting-Edge of Organic Chemistry Asia (ICCEOCA)) 2015/11/1 Direct Catalytic Enantioselective Alkynylation of Ketimines

Das Amrita (博士) (環境調和創薬化学): 年会優秀発表賞 (日本薬学会 第136年会) 2016/3/29 Development of Oxidative Heck Reaction for the Late-Stage C-H Functionalization of Bioactive Compounds

徳益圭祐 (修士) (環境調和創薬化学): 年会優秀発表賞 (日本薬学会 第136年会) 2016/3/30 銅触媒を用いたカルボン酸等価体の直接的化学選択的  $\alpha$  位アミノ化による  $\alpha$  アミノ酸合成

出口 亨 (修士) (環境調和創薬化学): 平成28年度九州大学薬学府修士課程奨学特別選抜入学者表彰 2016/4/11

中武大貴 (博士) (環境調和創薬化学): Best Poster賞 (第26回万有福岡シンポジウム) 2016/4/23 工業応用を志向した改良型亜鉛触媒によるエステル交換反応

中武大貴 (博士) (環境調和創薬化学): GSCポスター賞 (第5回JACI/GSCシンポジウム) 2016/6/3 Environmentally Friendly Ester Synthesis Reactions Catalyzed by Developed Zinc Catalysts

中武大貴 (博士) (環境調和創薬化学): アカデミックチャレンジ2016研究助成 (九州大学QREC) 2016/6/4

出口 亨 (修士) (環境調和創薬化学): 最優秀発表賞 (第53回化学関連支部合同九州大会) 2016/7/2 アミド型配向基の直接的触媒的加アルコール分解反応の開発

田中尊書 (修士) (環境調和創薬化学): 最優秀発表賞 (第53回化学関連支部合同九州大会) 2016/7/2 ホモカップリング体形成を経たエノラートの触媒的かつ酸化的クロスカップリング反応の開発

堀河力也 (博士) (環境調和創薬化学): JSPC優秀賞 (日

本プロセス化学会2016サマーシンポジウム) 2016/7/28 高活性鉄触媒によるエステル交換反応の開発

谷之口誠也 (修士) (環境調和創薬化学): 優秀発表賞 (第33回日本薬学会九州支部大会) 2016/12/4 アシルピラゾールの酸素雰囲気下における触媒的選択的  $\alpha$  位酸化反応

中武大貴 (博士) (環境調和創薬化学): 第10回GSC Student Travel Grant Award (公益社団法人新化学技術推進協会 (JACI)) 2017/2/18 実用的な亜鉛触媒による環境調和型エステル合成反応

森崎一宏 (博士) (環境調和創薬化学): 優秀発表賞 (日本薬学会 第137年会) 2017/3/26 N無保護トリフルオロメチルケチミンに対する直接的触媒的アルキル化反応

澤 真尚 (博士) (環境調和創薬化学): Best Poster賞 (第27回万有福岡シンポジウム) 2017/6/3 窒素上無保護のケチミンに対する直接的触媒的不斉Mannich反応の開発

近藤優太 (修士) (環境調和創薬化学): 最優秀発表賞 (第54回化学関連支部合同九州大会) 2017/7/1 新規BINOLリン酸触媒を用いた窒素上無保護の  $\alpha$ -ケチミノエステルに対する直接的触媒的不斉Friedel-Crafts アルキル化反応の開発

中武大貴 (博士) (環境調和創薬化学): ポスター賞 (第34回有機合成化学セミナー) 2017/9/14 改良型亜鉛触媒によるエステル交換反応

淵田大和 (院生) (生体分析化学): 第26回万有福岡シンポジウム、有機合成化学協会九州山口支部 ポスター賞 2016/4/23 タンパク質特異的ラベル化を目指した新規ペプチドタグ・亜鉛錯体プローブの開発

高田雄介 (院生) (生体分析化学): 第53回化学関連支部合同九州大会、ポスター賞 2016/7/2 AM contactシステムの拡張を目指した新規蛍光分子のデザイン

川越亮介 (院生) (生体分析化学): 日本薬学会第137年会、優秀発表賞 2017/4/13 細胞内パーサルファイドを可逆的に検出可能な蛍光レシオプローブの開発

淵田大和 (院生) (生体分析化学): 第21回日本がん分子標的治療学会学術集会、ポスター賞 2017/6/15 CFA基を利用した特異的共有結合性EGFR阻害剤の開発とその機能評価

徳永啓佑 (院生) (生体分析化学): 第54回化学関連支部合同九州大会、ポスター賞 2017/7/1 新規反応性基を持つ不可逆的EGFR阻害剤の標的選択性評価

川良建祐 (博士3年) (生物有機合成化学): 薬学会第136年会 学生優秀発表賞 (口頭発表) 2016/4/11 DNAのB $\rightarrow$ Z遷移と[5]ヘリセンリガンドのキラル変換が同期するシンクロナイズド不斉誘起

菊田健司 (博士1年) (生物有機合成化学): ISNAC Outstanding Poster Award in 2016 2016/9/30 Oligonucleotides Incorporating the 4-Vinylpyrimidine Derivatives to Investigate the Cross-link Formation with mRNA

川良建祐 (当時博士3年) (生物有機合成化学): 薬学会第137年会 学生優秀発表賞 (ポスター発表) 2017/4/12 DNAのB $\rightarrow$ Z遷移と[5]ヘリセンリガンドのキラリティー変換による動的シンクロナイゼーション

大城郁也 (博士3年) (生物有機合成化学): 薬学会第137年会 学生優秀発表賞 (口頭発表) 2017/4/12 RNA部位特異的修飾能を持つ官能基転移核酸の開発と遺伝情報制御法への応用

真方祐哉 (修士2年) (生物有機合成化学): 薬学会第137年会 学生優秀発表賞 (口頭発表) 2017/4/12 3本鎖

DNA中のTA塩基対を選択的に認識可能な人工核酸の合成

菊田健司 (博士2年) (生物有機合成化学) : 日本核酸医薬学会第3回年会優秀発表賞 (川原賞) 2017/7/14 誘起反応性アルキル架橋剤を用いたmRNAのアンチセンス阻害と*i*-motifの安定化

石田悠馬 (生命物理化学分野) : 7th Biennial Meeting of Society for Free Radical Research-Asia Yong Investigator Award 2015/12/2 Development of oxidation-reduction substance for redox imbalance revision

石田悠馬 (生命物理化学分野) : 日本薬学会第136年会 学生優秀発表賞 2016/3/29 酸化LDL中の脂質由来ラジカルを標的としたTurn-ON型蛍光プローブの開発

島内 司 (大学院生) (九大病院・手術部・麻酔科) : 第130回日本薬理学会近畿部会・優秀発表賞 2015/11/19 ドキソルビシン心筋症におけるTRPC3-Nox2複合体の役割

重松智博 (臨床6年) (創薬育薬産学官連携) : 第68回日本薬理学会西南部会優秀発表賞 2015/11/21 P2Y6受容体のリガンド非依存的活性化の分子機構

松金良祐 (臨床6年) (創薬育薬産学官連携) : 第68回日本薬理学会西南部会優秀発表賞 2015/11/21 心筋の低酸素ストレス適応におけるTRPC3チャネルの役割

石井千晴 (修士1年) (創薬育薬産学官連携) : 第23回クロマトグラフィーシンポジウムポスター賞 2016/6/17 種々の条件で保存したOvalbuminにおけるD-アミノ酸残基の生成解析

石郷翔人 (博士1年) (創薬育薬産学官連携) : Chromatography Outstanding Student Paper Award 2015 2016/6/17 Establishment of a Two-Dimensional HPLC-MS/MS Method Combined with DC1/D2O Hydrolysis for the Determination of Trace Amounts of D-Amino Acid Residues in Proteins

植木健治 (修士1年) (創薬育薬産学官連携) : 九州分析化学若手賞 2016/7/30 高分離能パークル型キラル固定相のデザインとNBD-アミノ酸の光学分割能評価

石郷翔人 (博士1年) (創薬育薬産学官連携) : 九州分析化学奨励賞 2016/7/30 重塩酸加水分解・二次元HPLC-MS/MSを用いるタンパク質中の微量D-アミノ酸残基分析法開発

謝 金玲 (修士1年) (創薬育薬産学官連携) : 第24回クロマトグラフィーシンポジウム優秀発表賞 2017/6/16 Development of a Two-Dimensional HPLC System for the Simultaneous Determination of Lactate and 3-Hydroxybutyrate Enantiomers in Biological Matrices Including Human Clinical Samples

石井千晴 (修士2年) (創薬育薬産学官連携) : Chromatography Outstanding Student Paper Award 2016 2017/6/16 Two-Dimensional HPLC-MS/MS Determination of Multiple D-Amino Acid Residues in the Proteins Stored Under Various pH Conditions

古庄 仰 (修士1年) (創薬育薬産学官連携) : 九州分析化学若手賞 2017/7/29 カラム内径比を制御した新規高感度型二次元キラルHPLC分析装置の開発と脳内D-アミノ酸含量の解析

木下怜子 (薬物動態学) : 日本TDM学会平成29年度「TDM研究」優秀論文賞 (大日本住友製薬賞) 2017/9/23 新生児から高齢者を対象としたバンコマイシンの母集団薬物動態解析および小児に対する初期投与量の検討

寺脇 毅 (院生) (薬効安全性学) : 次世代を担う創薬・医療薬理シンポジウム2016 Young Investigator Award 2016/8/24 GRK5は心筋梗塞後の炎症応答に関与する

寺脇 毅 (院生) (薬効安全性学) : 生体機能と創薬シンポジウム2016 優秀発表賞 2016/8/25 心筋梗塞時におけるGRK5の役割解明

松田翔一 (院生) (薬効安全性学) : 日本薬学会 第137年会 学生優秀発表賞 2017/3/27 心肥大時に生じる死細胞はMFG-E8を介して貪食除去される

御厨颯季 (M2) (ライフイノベーション) : 第32回日本薬学会九州支部大会優秀発表賞 2015/11/28 活性化ミクログリアにおける転写因子IRF1の役割

山本将太 (D3) (ライフイノベーション) : 第69回日本薬理学会西南部会優秀発表賞 2016/11/26 筋委縮性側索硬化症治療薬リルゾールはオキサリプラチン誘発末梢神経傷害を抑制する

山口千春 (M2) (ライフイノベーション) : 第90回日本薬理学会年会で学生優秀発表賞 2017/3/15 慢性掻痒におけるアストロサイトSTAT3の活性化メカニズム

兼久賢章 (M2) (ライフイノベーション) : 第90回日本神経化学学会大会で優秀発表賞 2017/9/7 Specific activation of GABAergic interneurons in the cervical dorsal horn suppresses chronic itch

坂本裕哉 (薬剤学分野) : 第69回 日本薬理学会西南部会優秀発表賞 2016/11/18 バンコマイシン誘発尿細管上皮細胞アポトーシスにおけるROSおよびMAPKの役割

白水翔也 (薬剤学分野) : 第29回 日本動物実験代替法学会一般演題 (ポスター) 優秀発表賞 2016/11/18 細胞がん化時における異常増殖能の獲得に必要なアミノ酸の同定

鶴留優也 (薬剤学分野) : 第10回 次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム 一般講演 (口頭) 優秀演題賞 2016/11/6 足場タンパク質NHERF1の発現リズムに基づいた脂肪酸輸送トランスポーターFatp5の発現制御

荻野敬史 (薬剤学分野) : 第10回 次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム 一般演題 (ポスター) 優秀演題賞 2016/11/6 がん幹細胞転写制御因子の機能操作による難治性乳がんの新規治療法に関する検討

鶴田朗人 (薬剤学分野) : 日本薬剤学会 Global Education Seminar 2016-2nd Global Education Seminar Presentation Award 2016 2016/10/22 The circadian clock machinery affects the pathophysiology in chronic kidney disease model mice

鶴留優也 (薬剤学分野) : 日本薬剤学会第31年会 最優秀発表賞 2016/5/21 足場タンパク質 (NHERF1) の発現リズムに基づいた肝細胞膜トランスポーターの機能制御

坂本裕哉 (薬剤学分野) : 日本薬学会第136年会 優秀発表賞 2016/3/28 バンコマイシンによる尿細管上皮細胞のアポトーシス分子機構とcAMPアナログによる保護効果

橋川健一 (薬剤学分野) : 日本薬学会第136年会 優秀発表賞 2016/3/28 化学物質誘発性原発がんの発症における時計遺伝子Clockの機能解析

荻野敬史 (薬剤学分野) : 日本学術振興会特別研究員 (DC1) 採用 2017/5/8 体内時計の分子機構から迫る難治性乳がんの新規治療戦略研究課題

吉田優哉 (薬剤学分野) : 九州大学ロバート・ファン/アントレプレナーシップ・センターのアカデミックチャレンジ 2017採択 2017/5/18 外部からの微弱電流 (マイクロ電流) 刺激を用いた慢性腎臓病に対する時間治療法の構築

鶴留優也 (薬剤学分野) : 九州大学教育改革シンポジウム2017 (ポスター) 優秀発表賞 2017/7/10 Circadian scaffolding function of NHERF1 for plasmalemmal expression of xenobiotic transporter in mouse liver

## ニュース

日刊工業新聞に掲載 九大、らせん分子で不斉合成触媒を開発  
2016/11/1 (薬物分子設計学)

分子衛生薬学 西田恭子(院生)が平成29年度 笹川科学研究助成に採択 2017/4/ (分子衛生薬学)

分子衛生薬学 人見将也(院生)が平成29年度 笹川科学研究助成に採択 2017/4/ (分子衛生薬学)

倉重伸崇の論文が Bioorg. Med. Chem. Lett. に掲載されました。論文掲載 Bioorg. Med. Chem. Lett. 論文名: Discovery of highly reactive peptide tag by ELISA-type screening for specific cysteine conjugation. 2017/5/24 (生体分析化学)

川越亮介の論文が Chemical Science に掲載されました。論文掲載 Chemical Science 論文名: Reversible Ratiometric Detection of Highly Reactive Hydropersulfides Using a FRET-Based Dual Emission Fluorescent Probe 2016/9/23 (生体分析化学)

青山恵梨子の論文が Chemical Communications に掲載されました。論文掲載 Chemical Communications 論文名: Intracellular delivery of chemical probes using a glutathione-responsive traceless tag 2016/6/21 (生体分析化学)

押川祐二の論文が Analytical Chemistry に掲載されました。論文掲載 Analytical Chemistry 論文名: Cell Surface-Anchored Fluorescent Probe Capable of Real-Time Imaging of Single Mast Cell Degranulation Based on Histamine- Induced Coordination Displacement 2016/1/26 (生体分析化学)

TV 報道 朝日放送「たけしの健康エンターテイメント! みんなの家庭の医学」で「脂肪のサビ」について研究成果が紹介されました。2017/2/14 (生命物理化学分野)

TV 報道 日本テレビ「世界一受けたい授業」に大和先生が出演し、「脂肪のサビ」について講義を行いました。2017/6/10 (生命物理化学分野)

研究成果(脂肪の「錆び」が癌化を促進することを発見)が Nature Chemical Biology にオンライン掲載されました。 Yamada K, Mito F, Matsuoka Y, Ide S, Shikimachi K, Fujiki A, Kusakabe D, Ishida Y, Enoki M, Tada A, Ariyoshi M, Yamasaki T, Yamato M. Nat Chem Biol. 2016 Aug;12(8):608-13. 2016/6/14 (生命物理化学分野)

「加齢高血圧の原因タンパク質を特定」朝刊および WEB 掲載(中日新聞、朝日新聞、毎日新聞、日経産業新聞、共同通信、NN マイナビニュースなど) 2016/1/20 (創薬育薬研究施設統括室)

「目録〜高血圧〜」朝刊掲載(中日新聞) 2016/3/14 (創薬育薬研究施設統括室)

「圧負荷により心臓が硬くなる原因を解明」朝刊および WEB 掲載(中日新聞、朝日新聞、読売新聞、日経産業新聞、日刊工業新聞など) 2016/1/20 (創薬育薬研究施設統括室)

「抗がん剤で心筋が萎縮する機序を解明 ~抗がん剤の副作用軽減に期待~」朝刊およびウェブ掲載(読売新聞、朝日新聞、中日新聞、毎日新聞、日刊工業、日本経済新聞、科学新聞、NN まいナビニュースなど) 2017/8/5 (創薬育薬研究施設統括室)

「高血糖時の TRPC6 発現増加が心不全発症リスク軽減・糖尿病性心不全予防に期待」NN まいナビニュース WEB 掲載 2017/8/9 (創薬育薬研究施設統括室)

仲矢道雄准教授らの研究が「The Journal of Clinical Investigation」に掲載されました。読売新聞・毎日新聞・西日本新聞・日経バイオテク・NHK 福岡・BS1「列島ニュース」・TNC「FNN スピーク」・TNC「もち浜ストア 夕方版」で紹介されました。「F1000Prime」の推薦論文に選ばれました。2016/12/6 (薬効安全性学)

長坂明臣助教らの研究が「Scientific Reports」に掲載されました。2017/8/10 (薬効安全性学)

仲矢道雄准教授の研究課題が AMED (PRIME) に採択されました。2017/9/25 (薬効安全性学)

黒瀬等教授らの総説が「Biomolecules & Therapeutics」に掲載されました。2017/1/1 (薬効安全性学)

黒瀬等教授らの総説が「Arch Pharm Res.」に掲載されました。2016/8/11 (薬効安全性学)

堀井雄真くん(修士1年)らのプロトコールが「Bio-Protocol」に掲載されました。2017/9/20 (薬効安全性学)

神経損傷後の脊髄後角ミクログリア細胞数の増加へ骨髄由来細胞の寄与に関する論文が掲載されました。Scientific Reports 誌 2016/3/24 (ライフイノベーション)

白鳥美穂さんがテニュアトラック助教として着任しました。2016/4/1 (ライフイノベーション)

津田誠教授が薬学研究院附属産学官連携創薬育薬センター長(併任)に就任しました。2016/4/1 (ライフイノベーション)

ヌクレオチドトランスポーター VNUT と神経障害性疼痛に関する論文が掲載されました。Nature Communications 誌 2016/8/12 (ライフイノベーション)

ヘルペス疼痛に対する新規 P2X4 受容体選択的拮抗薬の抑制効果に関する論文が掲載されました。Scientific Reports 誌 2016/8/31 (ライフイノベーション)

抗うつ薬デュロキセチンの P2X4 受容体抑制作用に関する論文が掲載されました。PLoS One 誌 2016/10/21 (ライフイノベーション)

P2Y12 受容体によるミクログリアでの CCL3 産生メカニズムに関する論文が掲載されました。J Neurochem 誌 2017/1/31 (ライフイノベーション)

吉岡優作(修士1年) トビクテ! 留学 JAPAN (日本代表プログラム) 2016 (病態生理学)

複製開始複合体の構造解明(京都大学との共同研究) TV 報道「FBS めんたいプラス」2016/11/29 (分子生物薬学)

神経障害性疼痛の概日リズム制御メカニズムに関する論文が掲載されました。Nature Communications 誌 2016/10/16 (薬剤学・グローバルヘルスケア)

薬剤学分野の研究内容が文藝春秋2017年10月号に掲載された。2017/9/11 (薬剤学・グローバルヘルスケア)

## 平成28年度 九州大学大学院薬学府修士課程 奨学特別選抜入学者

高藤 拓哉 医薬細胞生化学	八田 拓弥 ライフイノベーション	出口 亨 環境調和創薬化学
都築 洋太 医薬細胞生化学	兼久 賢章 ライフイノベーション	上高 彩希 薬物動態学
関根 美鈴 ライフイノベーション	多田 有佐 機能分子解析学	中尾 崇治 薬剤学

## 平成29年度 九州大学大学院薬学府修士課程 奨学特別選抜入学者

吉原 康平 ライフイノベーション	藤井 和司 薬物動態学	横山 拓哉 医薬細胞生化学
江口 和志 ライフイノベーション	嶋岡 雄大 薬剤学	石本 理子 医薬細胞生化学
柳井 美佑 薬物動態学	岩村 拓人 医薬細胞生化学	山根 拓也 ライフイノベーション
東原 咲季 薬物動態学		

## 平成28年度 日本学術振興会 特別研究員 採択者

DC1 堀河 力也 (環境調和創薬化学)	DC2 藤山 紗希 (蛋白質創薬学)	DC2 野下めぐみ (環境調和創薬化学)
DC1 松田 翔一 (薬効安全性学)	DC2 澤 真尚 (環境調和創薬化学)	DC2 川越 亮介 (生体分析化学)
DC1 大場 悠生 (薬効安全性学)	DC2 崎山友香里 (分子生物薬学)	

## 平成29年度 日本学術振興会 特別研究員 採択者

DC1 荻野 敬史 (薬剤学)	DC2 藤田 隼輔 (薬物動態学)	DC2 大城 郁也 (生物有機合成化学)
DC1 米寄 凌平 (環境調和創薬化学)	DC2 田島 諒一 (ライフイノベーション)	DC2 古賀 啓祐 (ライフイノベーション)
DC1 日下部大樹 (生命物理化学)	DC2 測田 大和 (生体分析化学)	PD 越智 拓海 (ライフイノベーション)
DC2 中武 大貴 (環境調和創薬化学)		

## 平成28年度 九大薬友会 評議員会議事録

- 【日 時】平成28年6月4日(土) 12時30分より14時40分まで  
 【場 所】九州大学薬学部 会議室(中央棟2階)  
 【出席者】評議員定数:役員16名、クラス評議員72名の合計88名(重複4名)  
 出席者数25名、委任状36名  
 役員:大戸茂弘会長、岩崎正武副会長、星野 修副会長、森元 聡  
 監事(新)、谷口陽祐庶務理事、松永直哉会計理事  
 支部長:柴田重信(関東支部長)、江頭 啓(永繁昌二関西支部  
 長代理)、唐澤博順(福岡支部長)、淀 光昭(長崎支部  
 長)、菅田哲治(局信男大分支部長代理)、中村仁美(井  
 本修平熊本支部長代理)、魚住太志(鹿児島支部長)  
 クラス評議員:増田義人、野田浩司、占部美子、塩川みほ子、江森節子、  
 赤司俊博、古賀信幸、飛松雅代、野田百美、小野容子、  
 伊藤祐二、森崎一宏

会議に先立ち、大戸茂弘会長より九大薬友会会則第19条1項の評議員会の定足数について説明があり、評議員会が成立した事が述べられた。

また、同条2項に基づき本会の議長は会長である事が説明された。

### 【報告事項】

- 平成27年度事業報告  
資料に基づき平成27年度の事業報告がなされた。  
また、グリーンファルマ研究所の状況等、薬学部の最近の状況報告がなされた。
- 各支部の活動状況  
関東支部、関西支部、福岡支部、長崎支部、大分支部、熊本支部、鹿児島支部の活動状況や財政状況が報告された。関東支部や熊本支部では全学の同窓会組織への参加など、支部の活性化を見据えた取り組みが報告された。

### 【議 題】

- 役員の改選  
平成28年度役員、支部長、評議員について資料に基づき説明がなされ承認された。役員、支部長の欄に評議員と同様に卒回を追記する事が提案され、今後資料に追記することが決定した。
- 平成27年度会計報告  
平成27年度の会計報告がなされ、特に変化の大きかった会費収入増の件、会誌のweb化に伴う支出減が説明され、承認された。
- 薬友会会則の変更(案)  
資料に基づき薬友会会則の一部変更案が説明され、原案のとおり認められた。
- 平成28年度事業計画(案)  
資料に基づき平成28年度事業計画案が説明され、原案のとおり認められた。
- 平成28年度予算(案)  
資料に基づき、平成28年度予算案の説明、原案のとおり認められた。  
薬友会の財政の改善状況や名簿発行費用に関する説明もなされ、繰越金のこれからの動向予測を再度行う必要があることが確認された。
- 九州大学同窓会連合との個人情報の共同利用  
資料に基づき、九大薬友会プライバシーポリシー案が説明され、原案のとおり認められた。また、九州大学同窓会連合会との情報の共同利用に関する覚書締結に向けてすすむことが了解された。薬友会会員の情報収集方法に関しては今後議論していくこととなった。
- 特別会員の推薦  
資料に基づき、特別会員の推薦がなされ承認された。
- 薬友会あり方検討会  
資料に基づき説明され、以下の事項が確認、決定された。
  - ・昨年度より本格始動した、薬友会ホームページ(Bikita)への登録をうながし、交流の場として広く活用する。特に、情報の発信源、就職情報源としても利用可能であるため、卒業生や在校生へホームページの存在を周知させる。
  - ・支部会の活性化および参加者増を期待し、各支部への薬学部教員演者を薬友会事務局も協力し引き続き行う。

## 平成29年度 九大薬友会 評議員会議事録

- 【日 時】平成29年5月27日(土) 12時30分より14時30分まで  
 【場 所】九州大学薬学部 会議室(中央棟2階)  
 【出席者】評議員定数:役員17名、クラス評議員74名の合計91名(重複4名)  
 出席者数26名、委任状42名  
 役員:大戸茂弘会長、岩崎正武副会長、星野 修副会長、田中宏幸  
 庶務理事(新)、谷口陽祐庶務理事(旧)、松永直哉会計理事  
 支部長:松野研司(関東支部長代理)、江頭 啓(永繁昌二関西  
 支部長代理)、唐澤博順(福岡支部長)、淀 光昭(長崎  
 支部長)、菅田哲治(局伸男大分支部長代理)、魚住太志  
 (鹿児島支部長)  
 クラス評議員:増田義人、占部美子、塩川みほ子、江森節子、小川建志、  
 樋口 駿、川原 章、古賀信幸、飛松雅代、小野容子、  
 島添隆雄、伊藤祐二、宮内 優、森田友己

会議に先立ち、九大薬友会会則第19条1項の評議員会の定足数について説明があり、評議員会が成立した事が述べられた。

また、同条2項に基づき本会の議長は会長である事が説明された。

### 【報告事項】

- 平成28年度事業報告  
資料に基づき平成28年度の事業報告がなされた。
- 九州大学同窓会連合会と個人情報の共同利用  
資料に基づき学生等の個人情報の共同利用に関する覚書の締結に関しての報告がなされた。
- 各支部の活動状況  
会長より薬学部の最近の状況(国家試験合格率100%など)グリーンファルマ研究所の状況(テレビ報道、AMED第3期など)の報告がなされた。  
各支部長より、関東支部、関西支部、福岡支部、長崎支部、大分支部、鹿児島支部の活動状況や財政状況が報告された。大分支部では全学の同窓会組織への参加など、支部の活性化(学生の参加、薬剤師ネットワークの活用など)を見据えた取り組みが報告された。

### 【議 題】

- 役員の改選  
平成29年度役員、支部長、評議員について資料に基づき説明がなされ承認された。
- 平成28年度会計報告  
平成28年度の会計報告がなされ、特に変化の大きかった会費収入増の件、年会費通知発送費の増(70歳以上の方へ送付)が説明され、承認された。
- 平成29年度事業計画(案)  
資料に基づき平成29年度事業計画案が説明され、原案のとおり認められた。
- 平成29年度予算(案)  
資料に基づき、平成29年度予算案の説明、原案のとおり認められた。  
薬友会の財政の改善状況や今後年配の会員への紙媒体での案内の送付にかかる費用の算出、また、繰越金のこれからの動向予測を再度行う必要があることが確認された。
- 特別会員の推薦  
資料に基づき、特別会員の推薦がなされ承認された。
- 薬友会ホームページのバナー広告に関して  
資料に基づき、バナー広告契約に関する規程および申込み方法に関して説明され、承認された。
- 薬友会あり方検討会  
資料に基づき説明され、以下の事項が確認、決定された。
  - ・薬友会ホームページ(Bikita)への登録者数の増加が報告され、今後さらにアクセス数などを増やすため、フォトアルバム、就職情報支援、バナー広告の充実を図る。
  - ・支部会の活性化および参加者増を期待し、各支部への薬学部教員演者を薬友会事務局も協力し引き続き行う。
  - ・九州大学同窓会連合会とも連携を深め、支部の活性化にも繋げていく。

## 九大薬友会会計報告

平成27年度 九大薬友会会計報告

### 【収入】

薬友会入会金 (6,000円×65口)	390,000円
年会費 (3,000円×1,287口)	3,861,000円
UFJニコスカード (66口)	183,269円
預金利息	174円
寄付金	22,470円
小計	4,456,913円
前年度繰越金	2,964,384円
合計	7,421,297円

### 【支出】

年会費通知発送費	544,504円
球技大会補助費 (春・秋)	40,000円
薬友会誌発刊費	491,000円
薬友会名簿発刊費	0円
インターネット同窓会システム利用料およびホームページ管理費	194,400円
九大薬学部祭費	100,000円
卒業祝賀会記念補助費	200,000円
支部支援金	775,000円
支部講演会支援金	200,000円
会議費	161,035円
通信費	6,778円
事務用品費	0円
金融機関手数料	15,936円
予備費	0円
小計	2,728,653円
繰越金	4,692,644円
合計	7,421,297円

## 九大薬友会予算

平成28年度 九大薬友会予算

### 【収入】

薬友会入会金 (6,000円×70口)	420,000円
年会費 (3,000円×900口)	2,700,000円
UFJニコスカード (3,000円×67口)	201,000円
預金利息	150円
寄付金	0円
小計	3,321,150円
前年度繰越金	4,692,644円
合計	8,013,794円

### 【支出】

年会費通知発送費	500,000円
球技大会補助費 (春・秋)	40,000円
薬友会誌発刊費	0円
薬友会名簿発刊費	1,850,000円
インターネット同窓会システム利用料およびホームページ管理費	200,000円
九大薬学部祭費	100,000円
卒業祝賀会記念補助費	200,000円
支部支援金	800,000円
支部講演会支援金	200,000円
会議費	165,000円
通信費	25,000円
事務用品費	1,000円
金融機関手数料	30,000円
予備費	100,000円
小計	4,211,000円
繰越金	3,802,794円
合計	8,013,794円

平成28年度 九大薬友会会計報告

### 【収入】

薬友会入会金 (6,000円×49口)	294,000円
年会費 (3,000円×1,082口)	3,246,000円
UFJニコスカード (63口)	174,399円
預金利息	22円
寄付金	49,000円
小計	3,763,421円
前年度繰越金	4,692,644円
合計	8,456,065円

### 【支出】

年会費通知発送費	552,576円
球技大会補助費 (春・秋)	40,000円
薬友会誌発刊費	0円
薬友会名簿発刊費	1,850,000円
インターネット同窓会システム利用料およびホームページ管理費	194,400円
九大薬学部祭費	100,000円
卒業祝賀会記念補助費	200,000円
支部支援金	769,000円
支部講演会支援金	200,000円
会議費	183,552円
通信費	1,200円
事務用品費	0円
金融機関手数料	12,352円
予備費	44,762円
小計	4,147,842円
繰越金	4,308,223円
合計	8,456,065円

平成29年度 九大薬友会予算

### 【収入】

薬友会入会金 (6,000円×70口)	420,000円
年会費 (3,000円×900口)	2,700,000円
UFJニコスカード (3,000円×67口)	201,000円
預金利息	150円
小計	3,321,150円
前年度繰越金	4,308,223円
合計	7,629,373円

### 【支出】

年会費通知発送費	550,000円
球技大会補助費	40,000円
薬友会誌発刊費	400,000円
薬友会名簿発刊費	0円
インターネット同窓会システム利用およびホームページ管理料	200,000円
九大薬学部祭費	100,000円
卒業祝賀会記念補助費	200,000円
支部支援金	800,000円
支部講演会支援金	200,000円
会議費	165,000円
通信費	25,000円
事務用品費	1,000円
金融機関手数料	30,000円
予備費	100,000円
小計	2,811,000円
繰越金	4,818,373円
合計	7,629,373円

# 博士(後期)課程 学位授与者一覽 (H27.11月 ~ H29.10月)

楊 波 H27.9.25 薬学府(創薬科学) リジン反応性ケージド人工核酸の開発と標的生体分子の部位特異的修飾への応用

赤間 勇介 H27.9.25 薬学府(創薬科学) 大腸菌の複製開始複合体によるDnaBヘリカーゼの進行阻害と一本鎖DNA結合タンパク質SSBによる阻害解除

亀岡 大介 H27.10.31 博士(創薬科学) Fundamental studies on deterioration of pharmaceutical humanized IgG - the effect of buffer, contribution of conformational stability and chemical cleavage in heavy chain constant region 2 domain, and detection of deamidated site of IgG - (医薬品ヒト化IgGの劣化に関する基礎的研究—緩衝液の効果、構造安定性と重鎖定常領域ドメイン2の化学的切断の関わりおよびアミド化部位の検出—)

渡 健治 H28.3.25 薬学府(創薬科学) 心筋梗塞時における炎症応答を制御する分子に関する研究

堤 国章 H28.3.25 薬学府(臨床薬学) 抗がん薬による末梢神経障害の発現機序解明とその対応策の探索

柴田 智博 H28.3.25 薬学府(臨床薬学) YB-1を中心とした乳癌及び胃癌の新規治療戦略

森木 邦明 H28.3.25 薬学府(医療薬科学) 医薬品の適正使用を志向した日常診療データに基づく母集団薬効動態解析-高尿酸血症治療薬フェブキソスタットと抗凝固薬ダビガトラン-

圃 鑫 H28.3.25 薬学府(創薬科学) 一酸化窒素によるDSS惹起大腸炎マウスの病態悪化機構の解明

押川 祐二 H28.3.25 薬学府(創薬科学) 新しい分子デザインに基づいた細胞機能リアルタイム解析のための蛍光プローブの開発

古賀鈴依子 H28.3.25 薬学府(創薬科学) 代謝関連キラルアミノ酸の高選択的二次元 HPLC 一斉分析法開発と生体内含量解析

岡村 秀紀 H28.3.25 薬学府(創薬科学) CG障害部位を選択的に認識する人工核酸の創製と3本鎖形成能の評価

江田 裕則 H28.3.25 薬学府(創薬科学) リガンド間の協奏的相互作用により繰り返しDNA配列に選択的親和性をもつ低分子リガンドの開発

實崎 大地 H28.3.25 薬学府(創薬科学) 遷移金属カチオンにより飛躍的に活性化される部位特異的RNA化学修飾反応の開発およびmRNA修飾による翻訳制御法の検討

村島 健介 H28.3.25 薬学府(創薬科学) Construction of Heterospin Molecule-based Magnets (ヘテロスピ分子磁性体の構築)

松岡 悠太 H28.3.25 薬学府(創薬科学) 2.6位置換蛍光ニトロキシドプローブによる生体内還元物質・脂質ラジカル種の高選択的蛍光検出・構造推定手法

澁谷 亮三 H28.3.25 薬学府(創薬科学) 遷移金属触媒を用いたアリールアルコールの直接変換反応の開発

清水 悠平 H28.3.25 薬学府(創薬科学) 温和な条件下におけるアミド結合の切断と形成反応の開発

五反田圭介 H28.3.25 薬学府(創薬科学) 薬物トランスポーターおよび薬効標的酵素の機能を制御する microRNAの同定と臨床応用

石川 達也 H28.3.25 薬学府(創薬科学) シルニジピンの適応拡大を指向した新規薬理作用の機序解析

深江 真登 H28.3.25 薬学府(臨床薬学) ファーマコメト릭スを利用した薬物応答性個人差要因に関する研究

會澤 誠大 H28.3.25 薬学府(臨床薬学) ヒト染色体複製開始因子Cdt1に結合する蛋白質GRWD1のヌクレオソーム形成活性及び崩壊活性の解析

佐藤 宏樹 H28.3.25 博士(創薬科学) 柑橘系飲料および健康食品による有機アニオントランスポーターOATP2B1を介した薬物-飲食物間相互作用

辻 敏和 H28.5.31 博士(臨床薬学) インシデントの総合解析に基づいた患者被害の縮小化への取り組み

柴田 憲宏 H28.6.30 博士(創薬科学) PPAR $\alpha$ / $\gamma$ デュアルアゴニストの創薬研究

Adila Dilixiati H28.9.26 薬学府(創薬科学) Role of glucocorticoids in the resetting of mammalian circadian clock, its implication with the biological activity of functional food (時計遺伝子の発現リズム位相変化におけるグルココルチコイドの機能解析および機能性食品による生体リズム同調促進作用に関する研究)

小川 亨 H28.9.26 薬学府(創薬科学) 新規P2X4受容体アンタゴニストNCP-916の鎮痛作用と薬物動態に関する検討

村上 拓也 H28.9.26 薬学府(創薬科学) 急性骨髄性白血病に対する高antibody-dependent cellular cytotoxicity活性抗体の有用性の検討および治療薬を目指した新規抗CD33抗体医薬品の創製

一木 裕子 H28.9.26 薬学府(臨床薬学) 病院薬剤師によるファーマシーマネジメントの実践に関する研究

小柳 香織 H28.9.26 薬学府(臨床薬学) 残薬確認と処方調整による医療費削減の評価および服薬アドヒアランス不良要因の探索—節薬バッグ運動を介して—

俵口奈穂美 H28.9.26 薬学府(臨床薬学) 音声コミュニケーション障害を有する患者のヘルスリテラシーに対する薬剤師の役割に関する研究—先天性聴覚障害者と喉頭摘出者を対象として—

崔 学柱 H28.9.26 博士(創薬科学) 軟サンゴフトウネタケ抽出物(MC-1)の抗炎症、抗アレルギー性皮膚炎作用発現メカニズムの解析

山本 由美 H28.10.31 博士(創薬科学) COX-2を標的とした新規イメーシング剤の開発 NSAIDs誘導体の合成および評価

松村 裕太 H29.3.24 薬学府(創薬科学) 脊髄グリア細胞およびATP受容体を切り口とした帯状疱疹発症メカニズムの解析

赤嶺 孝祐 H29.3.24 薬学府(臨床薬学) Chronopharmacological study for neuropathic pain hypersensitivity in type I and type II diabetic mice (I型およびII型糖尿病モデルマウスを対象にした末梢神経障害痛に対する時間薬理学的研究)

坂本 裕哉 H29.3.24 薬学府(臨床薬学) バンコマイシンによる腎障害発現機序の解明および保護薬物の探索に関する研究

Gorawit Yusakul H29.3.24 薬学府(創薬科学) Productions, characterizations, and applications of monoclonal and recombinant antibodies against daidzin and paclitaxel (ダイジンとパクリタキセルに対するモノクローナル抗体と組換え抗体の作製、特性評価並びに応用研究)

内川 拓也 H29.3.24 薬学府(薬学) マウス肝臓におけるメチル水銀の脱メチル化とホルムアルデヒド生成に関する研究

田中 駿大 H29.3.24 薬学府(創薬科学) DNAメチル化解析によるヒト肝臓における薬物動態関連遺伝子発現の個人差要因の解明

加唐 誠 H29.3.24 薬学府(臨床薬学) 電子カルテデータに基づく医薬品の個別適正使用を目指したファーマコメト릭ス

野村 浩子 H29.3.24 薬学府(薬学) 医薬品個別適正化使用を指向した日常診療データに基づく母集団薬効動態解析—DPP-4阻害剤—

原田 元 H29.3.24 薬学府(薬学) 治療薬物モニタリング (TDM) データを用いた母集団薬物動態モデリングアプローチによる親化合物および代謝物同時解析に関する研究 - 抗不整脈薬アミオダロンと抗てんかん薬クロバザム -

竹内 健二 H29.3.24 薬学府(創薬科学) 非アルコール性脂肪性肝疾患 (NAFLD) 動物モデルを用いた脂肪肝改善メカニズムに関する研究

川良 健祐 H29.3.24 薬学府(創薬科学) DNAの高次構造変化を誘起する[5]ヘリセンズペルミンリガンドの合成とシクロノイズド不斉誘起及び遺伝子制御への展開研究

村瀬 裕貴 H29.3.24 薬学府(創薬科学) Mg<sup>2+</sup>錯体形成によりDNAリビート配列に選択的な集積性を示す新規低分子リガンドの開発

渡邊 心也 H29.3.24 薬学府(創薬科学) GRWD1タンパク質は核小体ストレス応答に関与しているリボソームタンパク質RPL23をユビキチン-プロテアソーム系を介して量的に制御している

藤山 紗希 H29.3.24 薬学府(創薬科学) Mutational and Biophysical Studies on the Interaction of PriB and DnaT, Necessary for DNA Replication Restart in Escherichia coli (変異体及び生物物理的手法を用いた大腸菌DNA複製再開因子PriB・DnaTの相互作用の研究)

森崎 一宏 H29.3.24 薬学府(創薬科学)  $\alpha$ 位四置換炭素含有アミン類の環境調和型合成法の開発

岩田 直大 H29.3.24 薬学府(臨床薬学) 天然物由来であるcoumarinの肝障害リスク評価およびnutmegの抗うつ様作用に関する研究

渡部 卓磨 H29.3.24 薬学府(臨床薬学) 水中の8-oxodG特異的な検出デバイスの開発及びアフィニティカラムへの展開

瀧 靖史 H29.3.24 博士(創薬科学) 1,3-ジアザフェノキサジン環を基本骨格にもつ8位酸化グアノシンを標的とした機能性認識分子の開発

Amrita Das H29.9.25 薬学府(創薬科学) Development of Greener Synthetic Routes to Functionalize Heteroarenes (官能基化ヘテロアレーンの環境調和的合成法の開発)

李 釗 H29.9.25 薬学府(創薬科学) Development of Catalytic Chemoselective Conjugate Addition (化学選択的触媒的共付加反応の開発)

林 璐 H29.9.25 薬学府(創薬科学) Development of Transition Metal-catalyzed Direct and Chemoselective Alkylation Reactions (遷移金属触媒を用いた直接的と化学選択的置換反応の開発)

## 人事異動

異動日	所属	職名	氏名	異動内容	異動前の職業又は異動後の職業
平成28年2月22日	分子衛生薬学分野	教授	山田 英之	退職	平成28年2月22日逝去
平成28年3月1日	グローバルヘルスケア	教授	小柳 悟	昇任	薬剂学分野准教授から
平成28年3月31日	薬物分子設計学	教授	末宗 洋	定年退職	
平成28年3月31日	機能分子合成化学	教授	古賀 登	定年退職	
平成28年4月1日	生命物理化学	教授	山田 健一	昇任	機能分子解析学分野准教授から ※分野名変更(機能分子解析学→生命物理化学)
平成28年4月1日	グローバルヘルスケア	准教授	松永(門田)直哉	昇任	薬剂学分野助教から
平成28年4月1日	ライフイノベーション	助教 (テニユアトラック)	白鳥 美穂	採用	前職:薬学研究院学術研究員 特定プロジェクト教員 (テニユアトラック制教員) H28.4.1~H33.3.31
平成28年4月1日		特命教授	井上 和秀	命	H28.4.1~H29.3.31
平成28年6月1日	創薬育薬産学官連携	教授	濱瀬 健司	昇任	同分野准教授から
平成28年6月1日	生命物理化学	助教 (有期教員)	松岡 悠太	採用	日本学術振興会特別研究員(DC1)より
平成27年8月31日	創薬育薬研究施設 統括室	助教 (年俸制)	田畑 栄一	雇用期間 満了退職	IST Austria Postdoctoral Fellow
平成28年9月1日	薬物分子設計学	教授	平井 剛	採用	理化学研究所 専任研究員より
平成28年10月1日	(寄附講座)革新的バイオ医薬創成学講座	教授 (寄附講座教員)	米満 吉和	採用	~H29.3.31
平成28年10月1日	(寄附講座)革新的バイオ医薬創成学講座	助教 (寄附講座教員)	原田 結	採用	~H29.3.31
平成28年11月1日	細胞生物薬学	助教 (有期教員)	宮内 優	採用	米国NIEHS Visiting Fellowより ~H31.10.31 (廣田有子助教の支援教員)
平成28年11月1日	創薬育薬研究施設 統括室	助教 (年俸制)	進藤 直哉	採用	生体分析化学分野学術研究員より
平成29年1月1日	薬物動態学	准教授	廣田 豪	昇任	同分野助教より
平成29年1月1日	環境調和創薬化学	講師	森本 浩之	昇任	同分野助教より
平成29年1月1日	臨床育薬学	講師	小林 大介	昇任	同分野助教より
平成29年1月1日	臨床育薬学	助教 (有期教員)	川尻 雄大	配置換	病院薬剤師より ~H31.12.31
平成29年2月1日	グローバルヘルスケア	准教授 (有期教員)	Martinez Caaveiro, Jose Manuel	採用	東京大学大学院工学系主幹研究員より ~H34.1.31
平成29年2月1日	グローバルヘルスケア	助教 (有期教員)	山下 智大	採用	同研究院学術研究員より ~H32.1.31
平成29年3月31日	臨床育薬学	准教授	窪田 敏夫	退職	第一薬科大学教授へ
平成29年3月31日	細胞生物薬学	准教授	西村 行生	定年退職	
平成29年3月31日	分子イメージング分野	准教授	唐澤 悟	退職	昭和薬科大学教授へ
平成29年10月1日	分子生物薬学分野	准教授	尾崎 省吾	採用	~H29.9.30 バーゼル大学バイオセンター 博士研究員
平成29年10月31日	分子生物薬学分野	助教	加生 和寿	退職	スウェーデン国ウメア大学 博士研究員

# 同窓会公式ホームページのご案内

同窓会員の皆様の日常的なコミュニケーションの場となるSNS形式のホームページを運用中です。懐かしい再会、新しい出会いの場として楽しくご利用ください。



母校・同窓会の情報が満載!

<https://www.bikita.jp>

会員の皆様に確実に情報をお届けし、会員でない方との区別をするためログインIDを交付します。ID・PASSについては同封の振込用紙宛名面をご覧ください。

初めてログインすると会員登録画面となりますので必要事項を入力し登録完了してください。会員登録をすると会員限定の記事が表示され、右の機能をご利用いただけます。

## PC・スマートフォンから

九大薬友会 Bikita

検索



## 携帯・スマートフォンから



QRコードから  
<https://www.bikita.jp>にアクセスします。



あなたが登録した内容が表示されます。(変更可) 友連の名刺を、名刺一覧から探してみよう。

友連の名刺からメッセージが簡単に送れます。受信通知をEメールに転送できます。



広くお知らせしたい情報は掲示板に書き込みできます。操作はとっても簡単。作成内容がすぐに確認でき、後から修正もできます。



コミュニティは会員が自由に参加・コメント・開設できるグループ掲示板です。同じ同期・クラス・部活動・同じ趣味の人などで交流を深めよう!

自分で話題を作り、メンバーから書き込んでもらうトピックに、日時や場所を加えて出欠確認ができます。

**住所変更**  
転勤・引っ越し・結婚などで住所やお名前に変更がある場合はセキュリティフォームメールからお知らせください。

**バックナンバー**  
薬友会誌、評議員会議事録のバックナンバーを電子化し掲載しています。

**ID発行申請**  
ID・パスワードが分からない場合はフォームメールからお問い合わせいただけます。

**バナー広告募集**  
あなたのホームページにリンクします。詳しくは「広告について」からフォームメールを送信してください。

※同窓会コミュニティサイトBikitaは小野高速印刷(株)が運営管理し、薬友会事務局と正式に利用契約を結んでいます。会員のご利用は全て無料です。(通信料は利用者負担です。)



## 編集後記

薬友会の皆様いかがお過ごしでしょうか。昨年度は、薬友会名簿発刊の年にあたり、薬友会誌は発刊されませんでしたので、二年分の情報を今回はお伝えしております。

この二年の間に、熊本地震、九州北部豪雨を経験いたしました。被害を受けられた方々には、心よりお見舞い申し上げます。

薬学研究院の教員・学生は、皆様方に支えられて研究に全力で取り組んでおります。その成果をホームページで随時発信しておりますので、ご覧いただければ幸いです。また、九大薬友会のホームページ(Bikita)では、会員様への情報を適宜ご提供しております。是非ログインして頂き、同窓会など新たなコミュニティの場としてもご利用下さい。(https://www.bikita.jp/class/index.php?cl=f029e7)

このたびの薬友会誌の作成にあたり、薬学研究院各分野の先生方、ならびに学生係等の職員の方々、薬友会各支部の方々に大変お忙しいところご協力頂きました。また、小野高速印刷の皆様には、編集・校正で大変お世話になりました。深く御礼申し上げます。

最後になりましたが、今後も薬学研究院、薬友会への変わらぬご支援をよろしく申し上げますとともに、会員の皆様方のさらなるご健勝とご発展をお祈り申し上げます。(庶務理事：田中宏幸)